ゐのはな

千葉大学医学部同窓会報　第197号　題字　故 鈴木五郎（大11卒　元ゐのはな同窓会長）

編集発行者
千葉大学医学部
ゐのはな同窓会報編集部
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
ゐのはな同窓会
電 話（043）202-3750
FAX（043）202-3753
e-mail：info@inohana.jp
HP：https://www.inohana.jp/

―ゐのはな同窓会総会―開催のお知らせ

令和7年度ゐのはな同窓会総会を左記により開催いたします。

―大学支部担当―

1．日時
令和7年6月14日（土）
午後2時30分より
会場とWebのハイブリッド開催

2．会場
千葉大学医学部附属病院
ガーネットホール
（外来診療棟3階）
※当日は、病院の時間外出入り口よりお入りください。

3．議題
(1)名誉会員の推薦について
(2)年次活動について（報告事項）
(3)令和6年度決算について
(4)令和7年度事業計画について
(5)令和7年度予算案について
(6)役員の選出について
(7)その他

ゐのはな同窓会賞表彰式

ゐのはな同窓会賞受賞者挨拶

特別顧問挨拶
三木　隆司氏（昭63）
千葉大学大学院医学研究院長
大鳥　精司氏（平6）
千葉大学医学部附属病院長

【講演】
横手幸太郎氏（昭63）
千葉大学学長

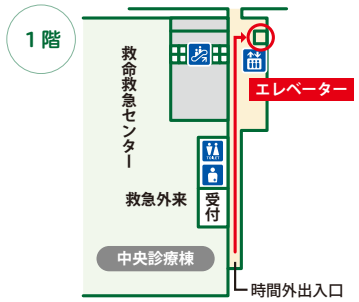
懇親会　午後6時より
於：Kitchen Pinako
（いのはなテラス　千葉大学病院外来棟正面玄関前）
会費　一万円
学生会員・平成23年以降卒業の会員は無料
（当日受付にて申し受けます）

※準備の都合上、ご出欠のお返事はお早めにお願い申し上げます。オンライン参加の方は6月6日までにゐのはな同窓会事務局（info@inohana.jp）まで、ご連絡をお願いいたします。総会のURL、パスコードをお知らせ致します。

総会出欠
回答用フォーム

【詳細につきましては、同封のお知らせをご覧ください。】

ガーネットホールへ案内



時間外出入口からまっすぐ。
途中右側のエレベーターで3階へ

千葉大学医学部創立150周年記念事業アーカイブページ公開

千葉大学医学部150周年記念文集（PDF版）の公開と共に、150周年記念事業として作成した「千葉大学医学部歴史年表」、「千葉大学医学部旧本館85年の記憶」（プロモーション動画）をアーカイブページにまとめて公開しました。

ゐのはな同窓会への寄附
千葉大学病理同窓会
３０２，０１９円

ゐのはな同窓会卒後50周年基金への寄附
昭和49年卒クラス会（三本の指の会）
１，０４２，５００円

ありがとうございました。

紙面紹介

総会開催　1
卒業祝辞　2
就任挨拶　3～5
人事異動　5
叙勲感想　6～7
退任挨拶　8
各地ゐのはな会　9～11
クラス会　12～14
看護学校の歴史　15
欧州医学史巡り　15
地区ゐのはな会報　16
学内情報　17～19
課外活動団体だより　19
著書紹介　19
会員から　20
日本医師会認定産業医研修会　21
議事要旨　22
編集後記　23
24

令和6年度千葉大学医学部 卒業証書伝達式・祝辞

令和7年3月23日（日）
ゐのはな同窓会長　吉原　俊雄（昭53）

千葉大学医学部ゐのはな同窓会を代表して一言お祝いを述べさせていただきます。本日はご卒業おめでとうございます。また、ご家族の皆さまにおかれましても、長く待ち望んだ晴れがましい日であり、期待に胸膨らむ貴重な卒業式となったことと存じます。

千葉大学医学部での教育課程のすべてを修め、医師としてのスタートラインを迎えたことになります。昨年は千葉大学医学部創立150周年であり、様々なイベントが催されました。皆さんは本学の今後の歴史を切り開いていく、まさに節目の卒業生となります。

本学入学以来、今日まで医学教育や病院実習にご協力いただいた多くの教職員の方々にも改めて感謝申し上げます。皆さんが、この「ゐのはなキャンパス」で学生生活を謳歌し、クラブ活動や様々な活動を通じて知り合った同級生、そして先輩や後輩との交流は今後の人生にとって貴重な宝物となるでしょう。

さて、皆さんはすでにゐのはな同窓会の学生会員です。卒業後はさらに医学・医療の発展に寄与するとともに、「白衣式」、「ちばBCRC」、「クラブ活動、東医体、亥鼻祭、同窓会館の利用」などの様々な支援を後輩の学生諸君に対して行っていく立場となります。

卒業後は様々な病院での研修生活を経て、臨床医、あるいは研究職、行政職、海外留学など様々な分野に進まれることと思います。そしてその地域も千葉大学病院、千葉県内の施設、さらには東京や他府県の大学や施設へと多岐に渡っていくことでしょう。一方で、皆さん自身は意識しておられなくとも、他大学の先生方は本学卒業生としての振る舞いを必ず見ていると思ってください。

皆さんの将来は前途洋々です。どうぞ自分自身で将来の進む道を選択し、努力を惜しまず邁進してください。私自身の経験をお話ししますと、若い頃は意識しておりませんでしたが、ある程度の年齢になり、一定のポジションに就いてきますと好むと好まざるに係わらず、周囲から千葉大学医学部出身であるということ再認識されてきます。また、思わぬところで初対面でも同窓の先生からサポートを受けることもあります。ゐのはな同窓会は7000人余りの会員が居ります。東京の国立、私立大学や病院にも多数の同窓が活躍されていますし、全国各地のOBからも支援を受けるはずです。「ゐのはな山」で苦楽を共にした先輩後輩には、遠慮せず頼って行って良いと思います。

最後になりますが、今日まで育んでいただいたご家族の方々には皆さんから改めて感謝してください。今後あらゆる方面で頑張っている姿を拝見すること同窓一同期待しております。ご卒業本当におめでとうございました。

令和６年度　卒業証書・学位記伝達式

第119回医師国家試験成績

試 験 日　令和７年２月８日（土）
９日（日）

合格発表　令和７年３月14日（金）

受 験 者　130名（新卒者　126名）

合 格 者　125名　合格率　96.2%
（新卒者　123名　合格率　97.6%）

参考　国立　合格者　4,951人
合格率　93.5%
全国　合格者　9,486人
合格率　92.3%

謝恩会

千葉大学大学院医学研究院長・医学部長再任挨拶

代謝生理学　三木隆司（昭63）

このたび、令和7年4月より、2期目の千葉大学大学院医学研究院長・医学部長を拝命いたしました。伝統ある千葉大学医学部の責任者を引き続き務めさせていただくことは、大変な光栄であり、改めて身の引き締まる思いでおります。これからの2年間、千葉大学医学部と大学院医学研究院の発展のために全力を尽くす所存です。

大学には常に多くの出来事がございますが、この2年間を振り返りますと千葉大学にとって重要な節目となる出来事がいくつかございました。特記すべきこととして、千葉大学は令和5年4月に、「地域中核・特色ある研究大学の連携による産学官連携・共同研究の施設整備事業」、12月に「同強化促進事業（J-PEAKS）」に採択されました。この指定は、並行して指定が進んでいる「国際卓越大学」と並び、文部科学省が我が国の研究活動拠点となる大学として認定するものであり、全国で25校が選ばれております。これにより、千葉大学は世界水準の研究を推進するための基盤を確立することができました。この成果は、千葉大学の全学的取り組みとして評価されたものであり、私自身はこの一員としてのささやかな貢献しか果たしておりませんが、申請に際しては多くの皆様のご尽力を賜りました。ここに改めて深く感謝申し上げます。また、今後5年間は医学研究院が先導して千葉大学の研究体制の構築と強化を牽引することが期待されております。引き続き、皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

さらにこの2年間、千葉大学医学部はいくつかの困難にも直面いたしました。中でも、全国ほぼすべての大学で大学病院の経営が大変厳しい状況が続いている中、令和6年度4月より厚生労働省主導の「医師働き方改革」がスタートしました。千葉大学でも医師の長時間勤務が是正される一方で労働時間の制限により人員配置が困難となるなど、大学病院の運営に大きな影響を及ぼしています。これに伴い、教員の研究時間が確保できずに研究面での国際競争力が低下しているばかりでなく、経営面においても超過勤務手当の増大など課題が山積しております。このような状況下、千葉大学では、医学部附属病院長である大鳥精司先生のリーダーシップのもと、迅速かつ多面的な解決策が講じられております。医学研究院としても、この改革を全面的に支援し、尽力してまいる所存です。

この様に、現在千葉大学医学部・大学院医学研究院および千葉大学医学部附属病院は変革の時を迎えております。千葉大学医学部の益々の研究の発展、病院での素晴らしい医療の実践と次代を担う優秀な人材の育成に向けて、引き続き、みのはな同窓会の同門の皆様方のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

就任挨拶

千葉大学予防医学センター

疾患予防医学　教授

小野　啓（東京大・平7）

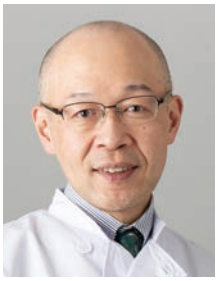
令和7年1月1日付で、千葉大学予防医学センター疾患予防医学の教授を拝命いたしました。多くの同窓会の方々にご支援を賜りまして、深謝申し上げます。

私は東京学芸大学附属高校出身で、平成7年に東京大学医学部を卒業し、同大学院にて代謝内科学の学位を取得しました。朝日生命成人病研究所を経て米国アルバートアインシュタイン医科大学にて視床下部インスリン抵抗性と糖代謝や摂食に関する研究を行いました。帰国後は埼玉医科大学にて研究・臨床・教育に携わり、高校の先輩である横手学長とのご縁で2016年度より本学の細胞治療内科学（現内分泌代謝・血液・老年内科学）に入局いたしました。2020年からは横手先生の病院長ご就任に伴い糖尿病・代謝・内分泌内科の科長を務めさせていただき、また企画情報部の副部長や千葉県糖尿病対策推進会議の理事も兼任することが出来ました。インスリンが血糖値を低下させる仕組みの基礎研究の他、臨床面では高度肥満症の診療を担当し、糖尿病とはまた異なる、より若く様々な症状に苦しむ患者さん達に伴走する診療を行ってきました。折しも新しい食欲抑制薬が認可されたタイミングと重なり、昨年2月には同薬剤を日本で第1例目の糖尿病のない高度肥満症の患者さんに投与し、様子をNHKニュースで放映して貰いました。また、コンピュータープログラミング技術を用い、臨床研究中核病院による「Real World Evidence創出のための取組み（臨中ネット）」という全国の電子カルテのデータベースを共通の形式にするためのプロジェクトのツール開発も行っています。

この度予防医学センターの教授職を賜りましたことから、まずは肥満・肥満症に関する実態調査を様々な方面から行いたく考えています。特に高度肥満の方は代謝疾患が無くとも膝関節症や肥満低換気症候群、不妊症といった重篤な合併症を持ち、かつスティグマにより家で苦しんでいることが多く、一念発起して病院を受診しても減量するようにの一言で帰されてしまう場合が少なくありません。これは医療従事者を含めた社会一般に、肥満は自己責任であり頑張れば痩せることが出来る、という誤解が残っていることに主因があります。一方で、美容目的で食欲抑制薬を適応のない方が用いることで、副作用や倫理的な問題が生じています。さらに、医療経済上でどのような方に抗肥満薬を保険適用するかという大きい問題があります。このような複合的な問題点を多面的な観点で考察し、効果的な介入方法を発案する上で今回戴いた役職を最大限に活用してゆく所存です。

「メタボ」という言葉は既に予防的な概念ですが、将来のことにのみ集中すると現在が疎かになる危険性があり、まず現時点で苦しんでいる方が医療にアクセスできていない問題を解決すべきです。そのうえで、無駄な予防や脅かしが無いようにするためには、予防すべき対象は誰か、効率を最適化する方法は何であるか、ということを考えてゆきたいと思います。同窓会の方々には引き続きご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

聖マリアンナ医科大学
消化器内科　教授
松本伸行（平3）



この度、令和6年12月1日付で聖マリアンナ医科大学消化器内科の教授を拝命いたしました。また、併せて聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院の副院長および消化器内科部長を務めております。千葉大学ゐのはな同窓会の諸先生の皆様にご挨拶させていただく機会をいただき、大変光栄に存じます。

私は1991年に千葉大学医学部を卒業し、第一内科に入局しました。当時はC型肝炎の診断・治療技術が確立され始めたころで、肝硬変に進展したC型肝炎患者さんから発癌する多くの患者さんの診療を通して、更なる医学の進歩が必要であることを実感しました。そうしたことを動機として、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院消化器内科を経て、国立がんセンター研究所分子腫瘍学部で寺田雅昭所長にご指導いただき、基礎研究に従事することとなりました。同研究室では、自殺遺伝子を用いた遺伝子治療の基礎研究に加え、血管新生を対象にした遺伝子治療のターゲット遺伝子の探索を行い、Kruppel-like factor（KLF）familyのKLF7をクローニングしました。KLF familyは細胞の分化に深く関与した転写因子で、KLF4はiPS細胞作成に必要な山中因子の一つであります。KLF7によく似た遺伝子にKLF6があり、肝線維化促進やがん抑制遺伝子としての働きが報告されていたことから、2001年12月から2005年8月まで米国New Yorkに研究留学し、Mt. Sinai医科大学のScott L. Friedman教授のもとで、KLF6の発生、分化における役割を検討しました。その成果はBlood誌に掲載されました。2005年に帰国してからは聖マリアンナ医科大学に籍を置き、消化器・肝臓内科の一員として仕事をすることになりました。

帰国後、臨床面では、1990年代から30年あまりの時を経てB型肝炎、C型肝炎に対する治療法は劇的な進歩を遂げ、診療の風景は大きく変わりました。肝細胞癌の治療も大きく変貌を遂げつつあります。私は患者さんにその時点の最適な医療を提供するための臨床活動に従事してまいりました。一方で、こうした医学、医療の進歩を実感するほどに、研究・教育の重要性も実感し、活動してきました。研究面では肝細胞癌に対する不十分なラジオ波治療が癌のさらなる悪性化を招く可能性があること、そのメカニズムは上皮間葉移行（EMT）であることを、肝癌細胞株を用いて報告しました。近年は、肝疾患の診療における新規X線造影剤の開発などの研究を進め、特許を取得して、実臨床に応用することを目指しております。教育面では、医学教育文化部門の教員を兼任し、聖マリアンナ医科大学の新カリキュラム策定に関わるなど、次世代の医師の育成にも力を注いでまいりました。

教授就任にあたり、これまでの経験を活かし、より一層診療の質の向上、研究の発展、教育の充実に努めてまいる所存です。

最後に、これまでご指導ご支援を賜りました多くの先生方、諸先輩方、そして同僚・後輩の皆様に心より感謝申し上げます。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

東邦大学医学部
病院病理学講座　教授
栃木直文（平12）

令和5年4月1日に東邦大学医学部病院病理学講座教授ならびに東邦大学医療センター大森病院病院病理部部長を拝命して2年が経過しました。私は大田区久が原の出身で、麻布高等学校を卒業後に千葉大学医学部に入学しました。平成12年4月に石倉浩教授（北大・昭55）が主宰されていた病態病理学講座（旧来の病理学第二講座）の大学院生となり、胃癌の形質転換で学位を取得しました。その後、国立がんセンター中央病院のがん専門修練医および研究所病理部の研究員として、5年半築地キャンパスにおりました。その後、医師免許取得直後からずっとお世話になっていた総合病院国保旭中央病院の吉田象二病院長（昭47）および鈴木良夫臨床病理科部長（北大・昭60）のご高配のもとで米国ピッツバーグ大学に1年留学し、肺癌を中心とする胸部悪性腫瘍の解析的研究に従事しました。帰国後は医長として旭中央病院に勤務しておりました。

平成23年4月、東日本大震災の直後に母が急逝し、行政解剖になりました。父が実家で独りになってしまいましたが、ご縁があり東邦大学で職を得ることができました。教員としては、どの領域に行っても役に立つことを話すことを心がけ、過去問と少しだけ違う問題を量産してまいりました。その結果、医学部および大学院医学研究科でのベストティーチャー賞、さらに東邦大学教育賞を頂くことができました。診療に関しては宵越しの標本を持たない、を目標として掲げ診断業務の円滑化を図ってまいりました。この姿勢に賛同して、専攻医となった教え子が在籍していることが励みになっております。研究に関しては当講座の主たる研究対象である深在性真菌症のうち、主に糸状菌の解析を通じて厚生労働省班会議などに貢献することができました。さらに本学に隣接する大田区立大森第三小学校のPTA会長を拝命したことを契機として、主に小学校における「がん教育」に注力しております。自分の話を聞いて医師を志した、と言ってくれる方が出てくることが今後の目標の一つです。

千葉大学と東邦大学とで構成されている「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」については、以前お目にかかった先生方が関与しておられ、これから自分にもそういった機会が増えてくるように感じております。見返してみますと、様々な場所で培ってきたご縁によって今の自分があると感じます。まずは次世代の育成が重要であり、公的化された共用試験をはじめとして、自分たちが医学生だった時は影も形もなかった様々な事象について、的確な学修が行われるよう環境整備を行う必要があるのだと痛感しています。病理診断医としては、適切な病理診断および解析的研究が診療水準の向上と医療安全の根幹をなすことを常に意識して行動していきたいと考えております。皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

開催予定の行事をお知らせ下さい

学会、研究集会、ゐのはな会、クラス会など種々の行事開催予定とその内容について、同窓会事務局へお知らせ下さい。本会報に掲載いたします。なお、本会報の発行月は1月、5月、9月です。

国際医療福祉大学医学部

小児科学　教授（代表）

塩濵　直（平15）

千葉大学ゐのはな同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。令和7年（2025年）4月1日付で、国際医療福祉大学医学部小児科学教授（代表）を拝命致しました塩濵直と申します。濱田洋通先生（千葉大学小児病態学教授）を始めとした千葉大学小児科の同門の先生方、医学部附属病院の診療科の先生方には、日常診療から研究まで、幅広く御支援を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は、平成15年に、千葉大学医学部を卒業致しました。初期研修医制度が開始する前年でしたので、ただちに河野陽一先生（現千葉大学小児病態学名誉教授）の主催される小児科教室に入局して、小児科医としてのあゆみが始まりました。同期の先生方と切磋琢磨しながら素晴らしい時間を過ごせました。卒後2年目に勤務した病院で、急性脳症のお子さんを担当しました。治療後の重い後遺症が残った状況と、ホームビデオで撮影された病前の元気な姿を拝見して、小児神経分野に進むことに決めました。

その後、関連病院で貴重な臨床経験を積ませて頂いた後に、2008年に千葉大学医学部附属病院に戻り、藤井克則先生（前国際医療福祉大学医学部小児科学教授）に師事して、小児神経の臨床と研究のイロハを教えて頂きました。Hedgehog経路の先天的亢進に起因するGorlin症候群について様々な研究を広く指導して頂きました。2013年に『酸化ストレスによる骨芽細胞分化抑制におけるHedgehog経路の働き』をテーマに医学博士過程を修了しましたが、それ以降も、Hedgehog経路やPI3K/AKT経路などの増殖シグナルの脳形態制御機構に興味を持ち続けております。脳形態解析研究を発展させるために、当時の下条直樹先生（前千葉大学小児病態学教授）から後押しを頂き、2018年にハーバード大学ボストン小児病院Fetal Neonatal Neuroimaging and Developmental Science Centerに客員研究員として留学し、高橋恵美博士（現マサチューセッツ総合病院Athinoula A. Martinos Center）に師事して、生体及び剖検脳のMRI定量解析を習得しました。この経験を起点として、様々な疾患脳・モデルマウスの脳形態解析や健常小児の性別・年齢毎の脳形態基準値の作成などの研究を形にすることができました。現在は、基礎研究で培われた脳形態解析の手法を日常診療でも活用することを目標として研究を継続しています。

赴任いたしました国際医療福祉大学は、医療福祉分野の総合大学として開学された背景がある学際的な大学なため、研究の広がりに夢を膨らましております。これまでの経験を踏まえつつ、気持ちを新たに、千葉県の小児領域の診療体制の構築と脳形態研究に尽力する所存ですので、引き続き御指導頂けますと幸いです。

獨協医科大学埼玉医療センター

小児科　主任教授

高谷　具純（平15）

令和7年（2025年）4月1日付で、獨協医科大学埼玉医療センター小児科主任教授を拝命いたしました。これまでご指導を賜りましたゐのはな同窓会の諸先生方に、心より御礼申し上げます。

私は小児期に1型糖尿病を発症し、千葉大学医学部附属病院小児科に入院して治療を受けた経験から、小児科医を志し千葉大学医学部に入学いたしました。医学部在学中には、清野進教授が主宰されていた細胞分子医学教室に通い、糖尿病研究について学ぶ機会をいただきました。なかでも、当時教官として大学院生を指導されていた三木隆司先生（現医学研究院長・医学部長）からは、分子生物学およびその実験手法についてご指導を賜りました。

2003年に千葉大学医学部を卒業後、河野陽一教授が率いられていた小児病態学教室に入局し、千葉県こども病院、国立病院機構千葉医療センター、帝京大学ちば総合医療センターにて研修を行いました。2007年には千葉大学大学院へ進学し、当時小児科内分泌班長であった皆川真規先生（現千葉県こども病院長）のご指導のもと、骨代謝および糖代謝の研究に従事いたしました。2011年に博士号を取得後、2012年より米国ハーバード大学医学部附属ジョスリン糖尿病センターRohit N. Kulkami教授の研究室に留学し、膵β細胞に関する研究を行いました。帰国後は、下条直樹教授が率いられていた小児病態学教室に戻り、小児内分泌疾患の診療および研究に従事いたしました。その後、濱田洋通教授が新たに小児病態学教室に着任されてからは、ご指導のもと医局長を拝命し、診療・研究・教育に加えて医局運営についても多くを学ばせていただきました。これまでご指導、ご支援くださった多くの先生方に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

獨協医科大学埼玉医療センターは、埼玉県越谷市に位置し、近隣にはレイクタウンなどもあることから、子育て世代に人気のエリアとして現在も人口増加が続いております。埼玉医療センターには小児病棟、NICUに加えて「子どものこころ診療センター」も併設されており、からだとこころの両面から子どもたちを支える環境が整っております。この恵まれた環境を最大限に活かし、小児医療のさらなる発展に尽力してまいります。

今後とも、ゐのはな同窓会の先生方には変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

人事異動

教授

先端データ医科学（旧遺伝子生化学）
伊藤　薫（金沢大・平13）

感染病態学
鈴木　忠樹（北海道大・平14）

真菌医学研究センター
渡邉　哲（平5）

予防医学センター
小野　啓（東京大・平7）

准教授

産婦人科学
石川　博士（金沢大・平7）
産科・婦人科講師より

画像診断・放射線腫瘍学
横田　元（平17）
同講師より

産科・婦人科
楯　真一（慈恵医大・平7）
同講師より

講師

代謝生理学
波多野　亮（東北大薬・平20）

腎臓内科学
本田　大介（札幌医科大・平21）
腎臓内科助教より

小児外科
光永　哲也（筑波大・平11）

整形外科
松浦　佑介（富山医薬大・平15）
整形外科学助教より

耳鼻咽喉科
飯沼　智久（平18）
耳鼻咽喉科・頭頸部腫瘍学助教より

国際高等研究基幹
富田　啓介（平19）
救急科助教より

他大学教授

聖マリアンナ医科大学　消化器内科
松本　伸行（平3）

東邦大学医学部　病院病理学講座
栃木　直文（平12）

国際医療福祉大学　小児科学
塩濵　直（平15）

獨協医科大学埼玉医療センター　小児科
高谷　具純（平15）

病院長

上都賀総合病院
知久　毅（平元）

深谷赤十字病院
石川　文彦（平2）

受章の挨拶

瑞宝重光章

令和6年秋の叙勲を受けて

徳久剛史（昭48）

令和6年秋の叙勲で瑞宝重光章を受章しました。この受章は、ゐのはな同窓会の先生方のご指導、ご支援のたまものと深く感謝申し上げます。

私は、学生時代に免疫に興味を持ち、初期臨床研修後に大学院で免疫学を専攻し、多田富雄先生（昭和34）のご指導の下、メンターの谷口克先生（昭和42）と奥村康先生（昭和44）から多くの薫陶を受け、在学中に奥村先生のご推薦によりスタンフォード大学へ留学しました。この留学では、生涯の研究テーマとなる免疫記憶細胞に出会うとともに、米国のスケールの大きさや快適な生活様式を実感しましたが、同時に日本の良さにも気付きました。その後、本学の免疫学教室の助手として研究を継続していましたが、研究の新たな展開を求めてドイツのケルン大学に二度目の留学をしました。この時には、当時開発された胚工学技術を習得するとともに、西欧文化の中で生活することで日本文化の素晴らしさを再認識しました。

帰国後は、胚工学技術により独自に作製した遺伝子操作マウスを用いた免疫記憶細胞分化に関する研究を開始し、昭和62年には神戸大学医学部に新設された免疫学教室の教授に採用され、幡野雅彦先生（昭和57）とともに研究室の立ち上げを一から始めました。研究活動も充実して来た平成5年には、本学医学部に新設された胚工学教室に配置換えとなり、その後20年間幡野先生とともに亥鼻の地で免疫記憶細胞の分化に関する研究を継続し、その分化のマスター遺伝子を同定することができました。

定年を迎えた時に齋藤康先生（新潟大・昭和43）の後任として学長に就任し、齋藤先生が推進されていたグローバル人材の育成に向けて西千葉キャンパスに国際教養学部を新設して海外留学を必修化しました。さらに、その教育効果が確認出来た4年後には、全学部・大学院生に対しても海外留学を必修化しました。後輩達にも学生時代に一度は海外生活を経験してほしいという思いから新設した全員留学制度ですが、文部科学省はじめ本学の教職員の皆さまのご支援とご協力があったからこそ実現したものと深く感謝しています。

学長退任後は、初志である臨床医としての社会貢献を目指して、渡邊寛先生（昭和41）のご推薦により千葉市内の介護老人保健施設で要介護高齢者の健康管理を行っています。臨床研修以来50年振りとなる診療活動に戸惑うことも多い日々ですが、スタッフの皆さんに助けられてなんとか頑張っています。ゐのはな同窓会の先生方には、これまでのご支援に感謝するとともに、引き続きご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

瑞宝中綬章

叙勲を拝受して

田邊政裕（昭49）

私は1974年（昭和49年）本学卒業後、小児外科に興味があり旧第二外科に入局しました。国保成東病院での外科研修を経て大学病院に戻り、高橋英世教授、大沼直躬教授のご指導のもと小児外科学を専攻してきました。25年間、小児外科の診療、研究、教育に従事してきましたが、1999年（平成11年）に50歳で附属病院の卒後・生涯医学臨床研修部（研修部）に異動しました。研修部は医師の卒後研修、生涯教育を国立大学附属病院において組織的、効率的に推進することを目的に1989年（平成元年）に創設された教育、研修に特化した組織です。就任時、卒前医学教育の改善等にも取組むべきことが職務に追加され、私は卒後研修、生涯教育に加えて卒前医学教育まで担当する教育専任の職に就くことになりました。専門が小児外科から医学教育へと変わり、その後15年間、医学部、附属病院で卒前医学教育、卒後研修、生涯教育に携わってきました。外科医育成は医学教育に通ずる部分が多く、50歳までの25年間の臨床経験は医学教育の実践に役立ちました。

我が国の医学教育は大学教育の改革と連動してグローバル化と患者ニーズ等多様な要請に応えるべく変革の時を迎えていました。千葉大学医学部では、医学教育の伝統がある米国イリノイ州立大学シカゴ校（UIC）からご助言をいただき、6年間の医学教育の学修アウトカムとして卒業時に「何ができる」をコンピテンシーとして明示し、それを確実に達成する教育（アウトカム基盤型教育、Outcome-based Education, OBE）を先駆的に導入・実施・発信してきました。OBEは教育の質保証の観点から優れた世界標準の大学教育となっており、千葉大学医学部は医学教育の方向性を先取りした先進校として位置づけられています。この取り組みは韓国、ミャンマーにおいても報告する機会があり、各国におけるOBEの普及に寄与することができました。

千葉大学を退官後は千葉県立保健医療大学において看護師、管理栄養士、歯科衛生士、理学療法士、作業療法士の育成に携わりました。教育、研究に加えて大学全体の管理・運営まで統括する立場になりましたが、ヘルス・ケア専門職の特徴、役割を改めて理解し、OBEを率先して導入・実施しました。各学科、専攻においては先駆的な取り組みでしたが、教職員の協力により成果を上げることができました。千葉大学を含め20年以上にわたり医学・医療者教育に取り組んできましたが（千葉医学99巻2号）、今振り返ると、達成された成果はUICとの交流にご尽力いただいた田川まさみ先生（鹿児島大学前教授）をはじめ、多くの学内外の教職員の皆さんのご指導・ご協力があってこそ成就できたと改めて実感します。皆さん、ありがとうございました。

叙勲、褒章その他祝事に関係された方は是非同窓会事務室までご一報下さい。編集部でも絶えず注意しておりますが、ニュースに接し得ない事態もあります。お喜びはなるべく早く、同窓の皆様にもお分けしたいと思いますのでよろしくお願い申しあげます。

旭日双光章

叙勲の栄に浴して

加藤友衛（昭38）

私は、勲章には縁はないものと思っていましたところ、この度、２０２４年高齢者叙勲にて旭日双光章を賜り、誠に栄誉なことと感謝しております。11月に入るとすぐ、千葉県医師会長、市川市長、市川市市議会議長さんから祝電をいただきました。また、内閣府賞勲局から内示リストと一緒に、いろいろな業者からギフトカタログなどが送られてくるから注意するようにとのお知らせもいただきました。しかし、その後、何の音沙汰もなく、どうしてよいのか分からずにいたところ、12月も末になって、高齢者叙勲というのは、皇居に参内せず、勲記とともに県の医療整備課が届けてくれるということが分かりました。そして今年に入って、拙宅に届けていただきましたが、その担当者のご実家が浦安も我がクリニックのすぐ近くだったのには驚きました。

私は、本学皮膚科学教室で、竹内勝教授、岡本昭二教授の薫陶を受け、昭和47年に東葛飾郡浦安町で開業しました。浦安町は交通の不便さから陸の孤島と呼ばれていましたが、昭和44年に地下鉄東西線が開通し、急速に発展し始めていました。当時、浦安で予防接種は、集団接種で1本の注射器で5人の園児・学童に接種を行っていました。接種医師は4名しかおらず大変なので私にも参加するよう要請されました。この時、参加の条件として、一人一人にディスポーサブル注射器を使用すること、という条件を出しました。町ではただちにこの要望を入れてくれたので、浦安町でのこの切り替えは、他の市町村に先駆けることとなりました。

当時、浦安町には医師会はなく、浦安の先生方は市川市医師会に属しておりました。私は、昭和55年から市川市医師会の理事を務めていました。担当は医事紛争と健康保険でした。理事2期4年目が終わるころ、浦安も市になったことだし、市川から独立して浦安に医師会を創るべきだということになり、2年後を目途に浦安市医師会を設立すべく浦安市医師会設立準備委員会を立ち上げました。私の担当は、定款の作成、社団法人認可申請とコンピュータの導入でした。法人申請には県庁に何度も足を運びましたが、年末に県庁に呼び出され、1月4日に書き直した定款を提出するよう言われ、正月休み返上でワープロを1から勉強し、なんとか間に合わせることができました。昭和54年から、千葉県国保の審査委員を務めておりましたので、新生浦安市医師会では保険担当理事として平成14年までを務めることになりました。

日本皮膚科学会東京支部（東京、埼玉、千葉、神奈川）の健保委員会が新宿の京王プラザホテルで年7、8回開催されていました。浦安なら都内へは近いからお前行けと言われて、昭和58年からオブザーバーとして参加していました。翌年に日本皮膚科学会の評議員になり、評議員の互選で運営委員になり、運営委員の互選で正式に健保委員になりました。滋賀県警から日本皮膚科学会に無資格者の医療行為について問い合わせがあった際、日本皮膚科学会健保委員会は時間的に開催困難ということで、代わって東京支部健保委員会で審議したこともありました。平成6年からは、日本皮膚科学会健保委員を兼ねることになりましたが、文科省の指導で、学会で診療報酬を扱うのはどうかということで健保委員会の名称を医療問題検討委員会に変更させられました。

浦安で医師会を作っていた頃、各地に臨床皮膚科医の会はあっても、全国組織の会がまだないのでそれを作ることになりました。医師会を作った経験を生かして手伝えとのお声がかかり、日本臨床皮膚科医会設立準備委員を仰せつかりました。最善の医療を提供するには、生涯教育の充実と医療制度・健康保険制度の適正化が肝要だということで、これを会の目的の2本柱として掲げ、昭和59年7月に設立され、私は常任理事を務めることになりました。当初は「財団法人学会事務センター」に事務を委託しておりましたが、飯田橋に自前の事務所を開設しました。

年に1回、臨床学術大会を開催し、生涯教育の充実を図る。また、全国の会員から、診療報酬の矛盾の改善、新たな医療技術の保険採用など要望を取りまとめ、日本皮膚科学会と連名で要望書を提出する。あるいは、高齢者の皮膚疾患有病率の全国調査をおこない、また、11月12日を皮膚の日と定め、一般市民向けの講演会や相談会を全国で実施するなどの活動を行ってきました。

常任理事から、理事、副会長となり、平成14年から2期8年間会長を務めました。平成16年5月には、記念すべき第20回総会・臨床学術大会の会頭を仰せつかり、3日間に亘りホテルオークラ東京で開催しました。20周年記念特別講演として、ノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊先生に「ニュートリノ天文物理学の誕生」と題してご講演頂きました。

ILDS（International League of Dermatological Societies）の総会は4年ごとに開催されるWCD（World Congress of Dermatology）の会期中に開かれますが、8年間の会長任期中、２００２年のパリと２００６年のブエノスアイレスに、我が国からの7名の代議員（日本皮膚科学会4名、日本臨床皮膚科医会1名、日本研究皮膚科学会1名、日本小児皮膚科学会1名）の一人として参加できたことは、とてもエキサイティングな出来事でした。総会の議件のひとつに、4年後のWCDの開催都市の選定があります。代議員の投票です。ブエノスアイレスの時には、次回開催地候補としてロンドン、ローマ、ソウルが立候補していました。この選挙運動がとても活発で驚きました。まず、出発前に県内の韓国人の先生から、どうやって私のことを調べたのか投票依頼の電話が来ました。次に、現地でのオープニングセレモニーのごった返す大会場で、また別の韓国の先生から声を掛けられました。それぞれの候補地はレセプションでアピールします。ロンドン、ローマはそれぞれの大使館で行われました。どちらの大使館も素晴らしい建物でしたが、門から玄関までは歩くと音がする砂利だったのが印象的でした。韓国は、シェラトンホテル最上階を借り切ってのレセプションのほか、学会会場内のホールを確保していて、会場でも怠りなくPRを行うという張り切りようで、投票結果は、韓国の努力勝ちでソウルに決まりました。

浦安市医師会理事会、日本臨床皮膚科医会理事会、各種委員会など会の運営については、市川市医師会時代に学んだことが大いに役立ちました。

これまで、私を支えて来て下さった方々に、あらためて感謝の意を表します。

退任挨拶

退任のご挨拶
想えば幸せな母校の日々

千葉大学大学院医学研究院脳神経内科学
桑原　聡（昭59）

２０２５年３月31日をもって定年退任いたしました。私は１９５９年に生まれ、新潟、横浜、群馬県で６年ずつを過ごし、１９７８年に千葉大学医学部入学を機に初めて千葉の地を踏んで以来、ほとんどの人生を千葉で送ることになりました。従ってほぼ千葉人とはいえませんが、約40年間を千葉で母校を中心とした人脈の中で過ごせたことは幸せな日々であったと感じています。

１９８４年の医学部卒業後は神経内科学教室（平山恵造教授・初代教授）に入局後は千葉大学医学部附属病院、松戸市立病院、千葉県救急医療センター、JR東京総合病院にて臨床神経学の研修・経験を経て１９９５年に服部孝道教授（第二代教授）就任時に千葉大病院助手として採用されました。この頃から神経生理学を独学で学び、１９９９年～２０００年に神経イオンチャネル生理学の権威であったDavid Burke教授（Price of Wales神経科学研究所、Sydney, Australia）でヒトのin vivoと動物実験での軸索イオンチャネル機能評価を並行して学び、研究の面白さと意義を学びました。

帰国後には、電気生理学を基盤としたギラン・バレー症候群など免疫介在性ニューロパチーの病態解析とともに、POEMS（クロウ・深瀬症候群）の治療として自己末梢血幹細胞移植・サリドマイド療法などを考案～導入し、各種疾患の新規治療を目指す治療学からの観点から臨床・研究を進めました。幸いこれらの結果の多くを論文として公表することができ、２００８年に神経内科学講座（２０１５年に脳神経内科学と改称）の第三代教授に就任し、末梢神経疾患だけでなく神経変性疾患（ALS、アルツハイマー病、パーキンソン病など）、神経免疫疾患などの研究グループを立ち上げ、教室の体制整備とともに、千葉県の脳神経内科診療を充実させるべく主要病院に脳神経内科を独立科として地域医療に貢献できるよう努めました。

教授在任は17年間でしたが、夢中で走り続けたように思います。想い起こしますと母校人脈の中で過ごせたことはかなり幸せな日々でした。ここに同窓の皆様に深く御礼申し上げます。また千葉大学医学部のさらなる発展を強く期待しております。

千葉とのご縁に感謝して

千葉大学大学院医学研究院環境生命医学
教授（予防医学センター兼務）
森　千里（旭川医大・昭59）

NIH/NIEHS（米国立衛生研究所／環境衛生科学研究所）でのポスドク研究で、胎児期の微量の汚染物質への曝露により不可逆的な心身への健康影響が現れることがある、と学んだことは、その後の人生の方向を決定づけました。NIEHSには世界中から優秀な人材が集まり、切磋琢磨する姿を見て、「自分も研究者として世界を舞台に活躍したい」と強く思ったのでした。

京都大学に戻り、助教授として研究を続けていたある日「千葉大学に行かないか」と教授から打診されました。

千葉大学に来てからは、解剖実習室の整備や、環境省主導の大規模コホート調査「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」に、千葉ユニットセンターとして立ち上げから尽力しました。「思いきり世界と勝負したい」との思いで、海外の学会やワークショップなどに積極的に発表に行きました。成田空港が近い事も大きなメリットでした。また、大学院生やスタッフを連れてドイツ、フランス、アメリカ、台湾の大学と環境保健に関する共催集中講義を開催し、スイスのWHO本部で小児環境保健の専門家会議を開催できました。四半世紀の間に、多くの大学院生や若手研究者が羽ばたいて行き、自分が千葉におかれた意義があるとすれば、人を育て、可能な限りプロモーションさせたことでしょう。定年まで勤められたことは、諸先輩方、同僚の先生方、スタッフの皆様のご支援のおかげです。深く感謝申し上げます。

東京みのはな会　総会のご案内

日時：令和７年７月５日（土）　16：00～19：30予定
会場：銀座アスターお茶の水賓館：JR御茶ノ水駅聖橋口
東京都千代田区神田駿河台４－３
新お茶の水ビル21F
https://www.ginza-aster.co.jp/shops/05ochanomizu/
会費：１万円（ただし平成27年以降の卒業者：卒後10年未満は無料です）
次第：
Ⅰ：理事会/議事と報告（16：00～）
Ⅱ：特別講演（16：45～17：30）
・三澤園子先生（平11：脳神経内科）
Ⅲ：ショートスピーチ（17：30～18：00）
・高谷具純先生（平15：小児科、獨協医科大学教授）
・高田章代先生（平24：放射線科、カナダ留学中）
Ⅳ：懇親会（18：00～）

静岡みのはな会
令和７年度　総会のお知らせ

日時：令和７年７月19日（土）　15：00～
会場：ホテルグランヒルズ静岡
学術講演会：15：30より
座長：JA静岡厚生連遠州病院　脳神経外科
難波　宏樹 先生（昭54）
講師：千葉大学大学院医学研究院　脳神経外科教授
樋口　佳則 先生（平４）
演題：脳神経外科の進歩：
脳機能を温存、改善させる治療へ

ゐのはな同窓会地区会長挨拶

茨城ゐのはな会　会長就任挨拶

茨城ゐのはな会
会長　松前孝幸（昭52）

この度令和7年4月より茨城ゐのはな会会長を前任の石川詔雄先生（昭和47年卒、筑波メディカルセンター名誉院長）より引き継ぎました。よろしくお願いいたします。

私は昭和52年千葉大学卒業後、米澤利英教授の主宰する麻酔科に入局し次の第2代教授の水口公信先生の時代まで大学に居ました。千葉市立海浜病院、千葉県救急医療センターを経て平成元年より国立水戸病院に麻酔科医長として赴任しました。その後平成12年に水戸市内にペインクリニックを開業して現在に至っております。

茨城県のゐのはな会はずいぶん前から同窓の先生方の集まりがあり、昭和30年代には水戸で少数の会員ながら同窓会が開催されることが多かったとのことです。その後同窓会員が急激に増えたのは昭和48年の筑波大学開学に伴い千葉大学から教官が派遣されてからです。腎臓内科、消化器外科、脳外科、精神科、病理、公衆衛生の教授陣と共に多数の医局員が千葉から筑波に来ました。さらに昭和60年の筑波メディカルセンター病院（初代院長は中田義隆先生昭和36年卒）、昭和63年の竹島徹先生（昭和41年卒）によるつくばセントラル病院の開設などに続くこの時代が茨城ゐのはな会の最盛期でした。

茨城ゐのはな会の会員数は平成18年には142名だったのが令和6年には77名と減少傾向が続いています。この様な状況の中、今後も中央ゐのはな同窓会に理事を派遣して本部との連携を維持することに努めます。また関東ブロックのゐのはな会との交流を従来通り図りたいと思います。この20年間は事務局を筑波メディカルセンター総務課で担当していただきました。しかし今回より会員が協力して業務をやる方針です。さらに今後の会員の減少に歯止めをかけるため入会者の勧誘に努めてまいります。

県内に同窓生は散在しています。その様ななか診療をはじめ様々な会議などで同窓の先生方と仕事をする機会もあります。そしてなによりゐのはな同窓会のつながりは千葉大学で共に研鑽した共通点もありファミリー的な存在です。山崎正志（昭和58年卒、前筑波大学整形外科教授、市原病院）、仁平武（金沢大・昭和58年卒、水戸済生会病院消化器内科）の両副会長と共に茨城ゐのはな会を維持して行きたいと思っております。

今後とも皆様がたのお力添えを頂けたら幸いに存じます。

各地ゐのはな会だより

埼玉ゐのはな会

令和6年度埼玉県支部総会が10月20日（日）午後3時から浦和のロイヤル・パインズ・ホテルで開催されました。

総会はこの1年間に逝去された6名の先生方に黙祷をささげ、吉川廣和支部長（昭40）の挨拶、中村勉先生（昭52）の令和5年度会計報告、西山秀木先生（昭54）の監査報告、お祝いとして白寿1名・喜寿5名の先生方の紹介がありました。今野慎「埼玉ゐのはな」編集部長（昭62）からは、発行部数423部、6年9月現在の会員数286名、印刷会社をネット印刷に変更したことでカラー化を達成し、且つ1／3の費用に圧縮できたが、10月より郵便料金の値上げがあり今後郵送費が上昇する旨の報告がありました。6月開催した幹事会の検討事項として、財政（お祝い金なし・会費値上げ）・総会（講師数1に減）・支部の区分け等につきそれぞれ内容を提示しました。群馬支部幹事には、鈴木守先生（昭39）・中島透先生（昭56）を決定し承認を得ました。次に諏訪敏一先生（昭43）による詳細な本部報告があり、5年度事業報告・6年度事業計画・医学部ホームカミングデー・医学部150周年記念事業企画・初代校長尾精一先生胸像再建などが示されました。

続いて2題の学術講演会を開催しました。講演（1）は、千葉大学医学部附属病院病院長、千葉大学大学院医学研究院整形外科学大鳥精司教授（平6）に「整形外科疾患の診断と治療　特に最も多い腰痛に関して」と題して講演頂きました。腰痛に対してのゲームを活用した治療、千葉大学整形外科のスポーツ特に駅伝に関しての思い入れ、頸椎捻挫など交通事故に関しての最近の知見など非常に多岐にわたる興味深い内容でした。講演（2）は、会員の獨協医科大学さいたま医療センター肝胆膵外科吉富秀幸教授（平2）に「進行膵癌の壁を破る！－進行癌に対する手術と集学的治療－」と題して講演頂きました。獨協医科大学埼玉医療センターにおいてダビンチ手術が先行する泌尿器科を上回る実績を上げていること、特に肝胆膵分野ではロボット手術の日本の最先端を走っている教室の素晴らしい成果、そして未来を語っていただきました。

講演会終了後全員で集合写真を撮り、懇親会に移りました。乾杯の挨拶と発声を、現役で手術もやっていらっしゃる永田一郎先生（昭35）に頂き、喜寿お祝いで出席の小川富雄先生（昭48）の挨拶後には、10年来の集合写真でお世話になっているお礼の気持ちで記念品を贈呈させていただきました。歓談にて旧交を温めましたが出席者33名と毎年横ばいの状態です。多くの支部会でも同様の傾向だそうですが、若い先生方の出席を期待したいものです。

（木村純）

写真右から

前列：今野慎（昭62）、木村純（昭49）、小川富雄（昭48）、吉川廣和（昭40）、大鳥精司（平6）、吉冨秀幸（平2）、諏訪敏一（昭43）、永田一郎（昭35）、原繁（昭53）、赤井壽紀（昭43）

2列：三浦敬正（平26）、斎藤雅彦（平3）、門山周文（昭51）、中村勉（昭52）、小林彰（昭52）、五月女直樹（昭49）、野口哲夫（昭48）、伊藤博（昭56）、中島透（昭56）

3列：船石裕樹（平30）、門平忠之（平13）、黒野健司（平8）、吉澤卓（昭53）、平山信男（平8）、門野源一郎（平6）、吉野啓人（令2）、小野崎郁史（昭59）、藤里雅史（令4）、石川文彦（平2）、植松武史（昭55）、上野直之（平11）　（敬称略）

栃木県ゐのはな会

２０２５年栃木県ゐのはな会総会が、1月26日（日）にJR宇都宮駅前のホテルマイステイズ宇都宮にて開催されました。

多くの初参加の方を含め38名の同窓の先生方にご参加いただき、コロナ明けで4年ぶりの完全現地開催とした前年と同等以上の盛会となりました。14時からの総会では、安藤克彦副会長（昭60）の司会のもと、森本直樹会長（平3）から、医療を取り巻く厳しい状況の中、同窓の繋がりを大切に「楽しい日本」ならぬ「楽しいゐのはな会」にしていきましょうと挨拶がありました。会計報告、監査報告につづいて、来賓としてお越しいただいた吉原俊雄千葉大学ゐのはな同窓会会長（昭53）から同窓会報告として総会の内容や長尾精一千葉医学専門学校初代校長胸像復刻除幕式の様子のほか、附属病院企画の創立１５０周年記念のイベントなどについてご講演をいただきました。また今回から県内でご活躍の先生からのミニレクチャーをいただくこととし、獨協医科大学産婦人科の三橋暁教授（平2）より子宮体癌へのメトホルミン併用臨床研究などの最新知見のお話がありました。

総会終了後には、本学より大塚将之臓器制御外科教授（昭63）をお迎えして「集学的治療時代の胆道癌診療」についてご講演をいただきました。教室のR0切除率の上昇、合併症低下の基となっている個別化した術前準備や、栄養と早期リハビリ、シンバイオティクスなど周術期管理の徹底のほか、進行癌に対する免疫チェックポイント阻害剤の進歩、さらには近年の外科医減少の現状や対応などについて大変解りやすくお話しいただきました。

その後、宍戸忠幸先生（平8）による司会進行のもと、本多睦人先生（昭42）のご挨拶と乾杯のご発声で始まった立食形式での懇親会では、再会を喜びまた新しくご参加の方との親交を深めるたくさんの輪ができて、大変賑やかな会となりました。お一人ずつ全員から近況をお話しいただき、あっという間に予定の時間が過ぎ、最後に村野俊一先生（昭50）の中締めにて、皆で再会を約束しての散会となりました。

（森本直樹）

写真右から
前列：安藤克彦（昭60）、本多睦人（昭42）、須田啓一（昭52）、小林進（昭54）、森本直樹（平3）、吉原俊雄（昭53）、大塚将之（昭63）、三橋暁（平2）、神作憲司（平7）、村野俊一（昭50）、種市洋（昭61）、山西友典（昭57）
後列：小川真司（平3）、山下彩香（令3）、佐野渉（平3）、瀬尾雄樹（平18）、篠田公生（平16）、秦利衣（平23）、橋場隆裕（平11）、北林宏之（平12）、左勝則（平18）、秦佳孝（平23）、吉住博明（平11）、川平洋（平4）、行澤斉悟（平9）、石塚満（平3）、宍戸忠幸（平8）、新保正貴（平11）、照井慶太（平10）、鎌迫智彦（平25）、戸邉豊総（平1）、廣瀬雅紀（平28）、上田昌弘（昭56）、河原井麗正（平19）、関口真紀（昭57）
（集合写真撮影後に来場、照井エレナ（平9）、柿沼薫（平24）、鈴木香合（平25））
（敬称略）

多摩ゐのはな会

第47回多摩ゐのはな会報告

令和6年11月9日18時から、昨年と同じ会場国分寺駅南口の居酒屋「北海道」で第47回多摩ゐのはな会を開催しました。

昭和の卒業生よりも平成の卒業生が多く、令和卒の若いドクターも参加してくれました。

若いドクターが後輩を誘ってくれて、今までの名簿では分からなかったメンバーが沢山参加しました。今後の活躍が楽しみな方ばかりでした。

多摩総合医療センター消化器外科医長の高橋誠先生の講演「多摩総合医療センター外科の現状－肝胆膵外科を中心に－」では、手術件数が増加しているとのお話があり、ロボット手術の興味深い動画を沢山紹介してくれました。

全国ゐのはな会会長の吉原俊雄先生が、参加して下さり、千葉大学病院の発展の様子や同窓生が、全国で活躍していることをお話してくれました。

鈴木先生の乾杯の音頭で懇談会が始まりました。お料理を楽しみながら、参加者全員が自己紹介と近況報告、抱負などを話しました。若手の先生からは、多摩ゐのはな会という集まりがあることを初めて知り、千葉から離れて少し寂しい思いをしていたが、同窓の縦の繋がりがあることが分かって心強いとの声がありました。

21時前に、鈴木先生の一本締めで会を終了しました。

（文責　石川てる代）

参加者・敬称略
（卒業年度）
鈴木光（昭36）、山本弘（昭39）、滝川弘志（昭43）、吉原俊雄（昭53）、上田源次郎（昭53）、石川てる代（昭53）、土田大介（平8）、高橋誠（平20）、矢部清晃（平23）、石澤嶺（平25）、坂上達也（平25）、塩谷悠斗（令2）、原直輝（令3）
写真右から
前列：滝川弘志（昭43）、鈴木光（昭36）、山本弘（昭39）、吉原俊雄（昭53）
中央：坂上美香（平25）、高橋誠（平20）、土田大介（平8）、上田源次郎（昭53）、石川てる代（昭53）
後列：原直輝（令3）、塩谷悠斗（令2）、石澤嶺（平25）、坂上達也（平25）、矢部清晃（平23）

順天堂ゐのはな会

順天堂ゐのはな会のご紹介

第1回の順天堂ゐのはな会は2024年9月20日に東京アメリカンクラブ日本橋で開催されました。第1回という事は、今まで順天堂大学に〝ゐのはな同窓会〟はなかったということです。その2ヶ月前に開催された東京ゐのはな会で奥村康先生（昭44、免疫学）、齊藤光江先生（昭59、乳腺外科学）と雑談をした際に、今の臨床研修制度では千葉大学卒業生が順天堂大学で勤務する機会も増えるだろうから、ぜひ順天堂ゐのはな会を立ち上げようという話になりました。

順天堂大学は本郷の順天堂医院（1051床）を始め、浦安病院（785床）、練馬病院（490床）、江東高齢者医療センター（404床）、静岡病院（633床）、越谷病院（226床）の合計6附属病院を持つ日本でも有数の大学病院です。これだけ大規模になると関連病院といっても交流は決して盛んとは言えず、同じ病院内でさえも診療科間の情報交換が難しいのが現状です。私もつい先日までは順天堂大学に一体千葉大学出身者が何人いるのかを全く把握していませんでした。母校を離れて現在は他学に身を置く立場でも、同じ千葉大学出身の同門ということであれば根っこは（良きにつけ悪しきにつけ？）一緒です。診療科や所属病院を越えて情報交換をしようというのが今回発足の趣旨になります。また順天堂大学でも同門が活躍している状況を発信し、もし東京で研修をしたい、働きたいという卒業生がいたら、順天堂大学がその選択肢に入る後押しが出来れば幸いです。

発起人は、順天堂大学の重鎮奥村康先生のほか、本院に在籍する齋藤光江先生、南野徹先生（平元、循環器内科）そして村上康二（昭61、放射線科）です。当日は順天堂大学在籍者8名の他、ゐのはな同窓会長吉原俊雄先生（昭53、耳鼻咽喉科）、東京ゐのはな会から岡本和久先生（平2、放射線科）のお二人をゲストでお招き致しました。今回は第1回目という事で、まず「ゐのはな会名簿」から順天堂大学所属者を探す地道な作業から開始を致しました。ある程度職位が定まった中堅以上は名簿から探すことが出来ましたが、ゐのはな会名簿の情報を更新していない先生、特に異動の多い若手は全く把握できていません。おそらく「自分も順天堂大学に所属している（いた）のに、声がかからなかった」という先生がいらっしゃると思います。今回は第1回という事でご容赦下さい。そして次回からは必ず連絡致しますので、ぜひご自分の連絡先を村上（k-murakami@juntendo.ac.jp）まで御連絡下さい。

第2回順天堂ゐのはな会は、2024年12月21日に開催され、この日の夕方には順天堂大学の学祖である佐藤泰然を主人公にした歴史小説「蘭医繚乱」を執筆された海堂尊先生の講演会が大学講堂で開催されました。講演会やその後の懇親会の様子はいずれご報告したいと思います。

（村上康二）

写真右から
齋藤光江（昭59、乳腺外科）、吉原俊雄（昭53、耳鼻咽喉科）、奥村康（昭44、免疫学）、岡本和久（平2、放射線科）、村上康二（昭61、放射線科）、寒竹正人（昭63、小児科）、南野徹（平元、循環器内科）、谷口摩也（令4、放射線科）、岡島耀史（平31、呼吸器内科）、河合祥雄（昭50、循環器内科）

（敬称略）

亥鼻麻布会

令和7年2月22日、京成ホテルミラマーレにて亥鼻麻布会が開催されました。

亥鼻麻布会は、麻布高校を卒業後、千葉大学医学部を卒業、または千葉県内で活躍する医師の集まりです。

正確な記録は残っておりませんが、旧第二外科 下鳥隆生先生、大沼直躬先生を中心に発足され、以来半世紀以上に渡って続いております。

数年おきに幹事を交代しており、現在は私、麻酔・疼痛・緩和医療科 内野慶次郎が幹事を務めております。

本年は学生3名を含む20名の参加となりました。

保坂泰昭先生の乾杯の挨拶の後、食事、歓談に一息ついたところで年長者から順番に麻布時代の思い出や、自身の近況をお話しする時間を設け、それぞれの話を笑い、懐かしみ、お祝いしました。

例年この会に参加されている、整形外科学教授、大鳥精司先生が千葉大学医学部附属病院、病院長に就任され、病院も経営状況や、ご自身の展望をお話ししてくださり、私もいち職員として身が引き締まる思いがしました。

また、近況報告として小児科 塩濵直先生より、国際医療福祉大学成田病院小児科教授就任のお話しがあり、皆で就任をお祝いした。

近況報告の後は立席して自由に歓談し、私も司会を放棄して皆様と楽しくお話しさせていただき、最後は医学部1年生 立石想くんの挨拶で会が終了しました。

毎年メーリングリストで案内をさせていただいておりますが、連絡のとれない先生もいらっしゃいます。参加のご希望や、麻布会で周知してほしい内容などありましたら是非私まで連絡お願いします。

（内野慶次郎）

写真左から
1列目：大鳥精司（平6）、中村文隆（昭49）、保坂泰昭（昭49）、田中尚武（昭59）、森永達夫（昭62）
2列目：塩濵直（平15）、神作憲司（平7）、淺沼克彦（順天堂大・平7）、久山順平（平元）
3列目：佐々木亘亮（平23）、尾﨑尚人（平29）、内野慶次郎（平29）、高橋宏和（平11）、竹下修由（平18）
4列目：立石想（医1）、沼口琢磨（医4）、青木孝浩（平20）、宮本龍河（医5）

（敬称略）

クラス会

参旧会（昭39）

昭和39年卒（参旧会という名前の由来）の我々にとって今年は卒後60年にあたります。その記念すべきクラス会は令和6年10月26日（土）に千葉市の京成ホテルミラマーレで開催されました。幹事役は碓井貞仁と伊藤晴夫でした。

卒後60周年記念ということで特別企画を考えようと、これまでクラス会を纏めて来た崎山樹君に加わって貰い何回も会合を持ちました。アルコールも入っての会ではなかなか名案は出ませんでしたが、最近の医学部に建てられた立派な建造物について、および参旧会の歴史についてスライドで紹介することに決まりました。なお、建築物を見学する案が出ましたが、土曜日には各建物は閉館されていることが分かり諦めました。

これ等のことを踏まえた伊藤晴夫の開会の辞につづいて、会が始まりました。今回の出席は20名でしたが女性会員の出席はなく、女性はご夫人3名のみでした。千葉市は交通に不便で、東京なら出席したという方も複数いて残念に思いました。

はじめに新しく建設された幾つかの建物の写真がスクリーンに映写されました。新医学部棟や医薬系総合研究棟Ⅰ及びⅡ、救急救命センターは素晴らしいものでした。また災害治療学研究所および藤井節郎記念治療学研究センターは未完成でしたが立派でした。旧同窓会館が無くなり駐車場に替わっていたことには、皆さん複雑な想いをしたようでした。

これに続いて碓井貞仁により参旧会の歴史についての上映が行なわれました。参旧会はコロナ禍での2年以外は毎年開催されており、千葉、東京だけでなく松本、つくば、京都、沖縄、徳島などでも開かれていました。時を遡るほど人数が増える集合写真に驚くと共に、こんなにも同級生が多かったのだと感じました。皆さんの往時の若々しい顔つきには感無量でした。これらのことが走馬燈の様に思い出されます。歳を取ったことを実感させられる一幕ではありました。

会の始まる前からジュースやスアルコールなどの飲み物が提供されていましたので、熱気は少しずつ高まっていました。映写の終わった後に、前回の幹事長であった深尾立君の乾杯の発声で本格的に宴が始まりました。参加者が一人ずつ近況や感じていることを話されました。体力の衰えたこと、病気のことなど余り景気の良くない話も多かったですが、各方面で活躍されている方も少なくなかったです。また秋草克彦君がカラオケを歌うなど和やかの中にも活気溢れた雰囲気の下で宴は進行しました。

最後に碓井貞仁より閉会の辞があり、開会迄の苦労話や、これまでに東京・千葉以外で開催された多くの参旧会について言及がありました。これからも毎年開催できることを期待し、来年のクラス会での再会を約して宴を終わることが出来ました。

年を経て絆深まるクラス会
集まれば時遡り若き顔
（文責：伊藤晴夫）

写真右から
前列：碓井貞仁、阿部一憲、鈴木守、今野貞夫、伊藤晴夫、山本弘、大塚嘉則、秋草克彦
後列：崎山樹、万本盛三、遠藤毅、遠藤夫人、深尾夫人、万本夫人、村上信乃、林学、上原朗、山下武広、河野守正、深尾立

42－48クラス会（昭42入学・昭48卒業）

本クラス会の構成メンバーは昭和42年入学か昭和48年卒業のいずれかに該当する同窓生です。新型コロナ流行前の2020年（令和2年）2月まではほぼ毎年開催されていましたがコロナ禍で開催が困難となったため、今回（2024年5月19日）は約4年振りの開催となりました。久し振りの開催のため参加者の人数予想が難しかったのですが結果的にはほぼ例年通りの34名の出席がありました。卒後51年を経過していますが皆、昔の面影を残しており名前を思い出せない級友は一人もなくホッと致しました。

会場は京成ホテルミラマーレ16階のイル・ミラマーレです。

同会場で集合写真を撮影した後に開宴となりましたが、それに先立ちこの4年間に鬼籍に入られた大槻俊夫君、漆原徹君の2名の級友のご冥福を祈り黙祷を捧げました。

開会は元千葉大学学長で我が学年の出世頭？である徳久剛史君の乾杯の発声に始まり、更に続けて学長在職中の興味深い逸話や千葉大学の発展のために尽くした数々の業績を披露していただきました。その中には新病院増設に伴い失われてしまった野球場、サッカー場、テニスコートなど我々

写真右から
前列：後藤澄雄、秋葉哲生、片桐博子、大内美南、山本義一、保阪亜莉沙、徳久剛史、河野陽一、千葉次郎、遠藤信夫、安野憲一、守田政彦、野口哲夫
中列：岩田泰子、木村秀樹、小川富雄、安東昌夫、川口英昭、森山紀之、田澤浩、菊地紀夫、岩本逸夫、竹中正治、梅田透、吉田明夫
後列：南昌平、鈴木晴彦、高圓博文、大塚裕、小林道生、野村馨、白井厚治、小川清
撮影時不在：浅野誠

が学生時代に講義室以上に通った思い出の運動場についても新たな整備計画が進んでいるようですので期待致しましょう。また今回の学長選の選考経過についても詳細かつ分かり易く説明していただき納得した次第です。

その後は出席者全員の近況報告に移りましたが、全員が後期高齢者となった現在では仕事をリタイアするものも多くみられました。体調面の話となるとさながら病気自慢の会と化してしまいました。最後に次回のクラス会に関してですが、やはり1年後に行おうとの事で幹事役は楽器演奏を得意とする後藤澄雄君、梅田透君、小川富雄君、野口哲夫君の4名にお願いしましたところ快諾を得ました。楽器演奏や歌で楽しいクラス会になりそうですので42−48クラス会の皆様、ご期待ください。

1年後に元気でお会い出来るのを楽しみにしております。

（遠藤信夫）

お詫び：事務局の掲載漏れにより1年遅れとなりましたことを深くお詫び申し上げます。

それからの「五十六それから」の会 於 台北（昭56）

「五十六（いそろく）以後卒」卒後会は、実はコロナ期までは毎年の様に開催されておりましたが、そのためか却って、みのはな同窓会報への寄稿は少なかった様な気がします。今回は、特別に、台湾ご出身で幹事の傅（ふ）永順さんと奥様の香蘭さんのお取り計らいで、台北にての思い出深い開催となりましたので、寄稿させて頂きます。

ことの発端は、前回コロナ明けの2022年（令和4年）11月開催のクラス会のおり、幹事の伊丹純君、道永（竹内）麻里さん、道永幸治さんたちが、たぶん思いつきで「次回は是非、台湾で」と言い出したのを、傅さんご夫妻に即座にご快諾頂いて、実現に至りました。

幹事の皆さんの2年に及ぶご準備ならびに遠路ご参加の皆さんのご協力により、晴れて2024年（令和6年）11月9日夕刻、台北は圓山大飯店（グランドホテル台北）國宴廳の間にて開宴となりました。聞けば、圓山大飯店は台湾の言わば迎賓館で、國宴廳はその最大奥の国賓級のダイニングとのことです。ここでの開催は、傅さんご夫妻の一方ならぬご尽力の賜物です。龍宮城の様な優美さ、絶品の料理に加え、揚琴と二胡の妙なる調べも花を添え、一生の思い出となる楽しいひと時でした。

台湾好きの何組かのご夫婦はクラス会前の数日に台南方面を、また多くの皆さんは翌日に台北市内を、いずれも傅さんご夫妻ならびにご親戚のご案内で観光させて頂きました。まさに台湾満喫の旅となり、各自、楽しい思い出とともに帰途につきました。

（瀧口正樹）

写真右から
前列：永嶌夫人、永嶌薫、佐藤二郎、佐藤夫人、縄野夫人、縄野繁、三浦正義、三浦夫人、丹沢夫人、丹沢秀樹
後列：福井博行、若林優子（客人）、石井猛、福井夫人、石井夫人、林田ゆみ（客人）、道永（竹内）麻里、森石丈二、林田雄一（客人）、傅夫人、傅永順、伊丹純、野水眞、高山夫人、高山篤也、道永幸治、瀧口正樹

平成2年卒クラス会

令和7年2月8日（土曜日）午後6時より、東京ドームホテルにて平成2年卒業のクラス会を開催しました。私達の学年は、年に1回のクラス会の開催を目標にしておりますが、前回が平成5年6月でしたので、1年8ヶ月ぶりになりましたが、無事開催することができました。今回は、整形外科が幹事を担当し、中川晃一、阿部功、神川康也、木下知明、老沼和弘で担当しました。

東京ドームホテル42階で、夜景をみながらの立食パーティーで、30人参加予定で、きっちり30人、二次会は同じホテルの6階のバーで20人参加予定で21人の参加でした。幹事としては、この参加率だけでも大助かりで、感謝です。

1次会では、中川晃一・東邦大学医療センター佐倉病院整形外科教授の乾杯の挨拶で始まり、しばし、ご歓談でしたが、立食というこもあってか、あちこちで楽しい歓談が止まりませんでした。このままでも十分かなと思っていたのですが、やはり、一人一人の近況報告は、ミッションだろうということになり、一人、1〜2分で、近況報告をしてもらいました。私達は卒後35年ということもあり、還暦を迎えた方も多く、仕事も子育ても一段落し、それなりの時間を過ごしているようでした。美容や健康に気遣う人、孫の話を始める人、文学部に入学したと

写真右から
前列：石和田稔彦、大渕徹、安西尚彦、浜口眞佐江
中前列：内野福生、小倉武彦、斎藤功、村越直人、國富（本郷）由紀子、国府田（渡辺）桂子、吉富秀幸、小林信義、秋本政秀
中後列：尾辻瑞人、鵜梶実、浦島哲郎、野澤聡志、阿部功、神川康也、木下知明、岡本和久
後列：鈴木敏幸、佐藤悟郎、岡田吉弘、勝野達郎、鈴木啓悦、老沼和弘、池田良一、根本俊光、中川晃一

いう人、また、ちょうど、この日は、医師国家試験の初日でもあり、お子さんが国試という方も何人かおりまして、今の医学生はiPadひとつで事足りてしまうそうで、ふと、電話帳のような過去問や教科書を机いっぱいに並べていた頃のことを思い出し、隔世の感がありました。皆さんの近況報告は時間もない中、話がかぶらないようにと話題も多彩で、ちゃんと1～2分で、話をまとめるあたりは、さすが千葉大レベル高しと感心しました。次回は第二内科が幹事担当してくれることも決まり、次回の開催を約束し、30名中21名が2次会へ移動しました。

2次会は、同じホテルのバーで、個室を貸し切り2時間飲み放題で盛り上がりました。60才を超えているので、飲み放題にしようか迷いましたが、飲み放題で正解でした。ラストオーダーギリギリまで、オーダーがとまらないという状態で、まあ、皆さん、酒の方はあまり衰えていないようでした。

（老沼和弘）

平成17年卒、卒後20周年同窓会

このたび令和7年2月23日に卒後20周年という節目で我々の同窓会を開催することができましたので、ここにご報告させていただきます。

この同窓会を開催することができた一つのきっかけは、学生時代から病を患っていた同期の故野見山淳君を偲び、別れを惜しむ会が前年の令和6年2月に執り行われたことにある。野見山君との苦楽をともにした学生時代をみなで語りあうことで卒業後しばらく止まっていた時計の針が動き始め、今年が卒後20周年であることも相まって自然と同窓会を開催しようという声が盛り上がることとなった。

開催された当日の丸の内はよく晴れ渡り天皇誕生日の一般参賀が行われていたこともあってか周辺は大いに混雑していたが、借り切った蕎麦屋のあるパレスビル地下は多くの店が閉まっておりひっそりしていた。しかし、11時半から受付を開始すると徐々に久々の再開をよろこぶ声があちこちで聞こえ始め、会がスタートする前から我々の時間は20年前にタイムスリップしていった。12時からは不肖ながら私柴山が司会を務めさせて頂き、乾杯には鏡開きをおこなって参加者47名で卒後20周年に相応しいスタートを宣言することができた。

ひとしきりの歓談の後、最初の企画として事前に準備していたアンケートの結果発表を行った。〝年収〟や〝子供のこと〟、〝自宅以外の過去の高額な買い物〟など同期だからこそ深く踏み込めた質問事項もあったが、予想外の結果も含めて学生時代の新たな発見や耳寄り情報のみならず、卒後20年という年月でそれぞれの道を模索している戦友たちの頼もしさを感じることができた。その後、惜しくも参加できなかった同期からのメッセージ、参加者全員の近況報告と中長期的な夢を発表してもらい、最後に特別余興として教授（鹿児島大学）に就任した横尾英孝君に就任挨拶と十八番のマジックショーを披露してもらい最高の盛り上がりをみせた。そして次回幹事となる北條林太郎君、横田元君が5年後の再開を約束して当会は閉会となった。

今回の卒後20周年同窓会を無事に開催できたことは平成17年卒の仲間全員が1年前から建設的につくりあげた結果であり皆に感謝を述べるとともに、とくに幹事を引き受けてくれた大西俊一郎君と野口基視さんに多大なるサポートをして頂いたことを記しておきます。みんな、また5年後に会おう！

（柴山謙太郎）

写真左から

最前列：清水学、鈴木快枝、中易夏子、横尾英孝、松村洋輔、宮脇恒太、亀山菜つ子、田島洋佑

前列：吉江うらら、大野綾子、木村正子、渡邊満野

中段：小倉浩史、山出史也、鈴木まみ、久保麻衣子、井口美奈、白井利行、中道真仁、平川健一郎、赤羽香奈子、力石浩志、古谷彩、蔡明倫、吉田暁子、吉田陽子

後列：高瀬正幸、安部元、宮原雅人、大西俊一郎、野村征太郎、長井恭子、秋場美穂、木村昭子、安良岡真理、柴山謙太郎、山舗陽子、目澤守人、舩越拓、市村康典、横田元、北條林太郎、野口基視、唐澤千裕、李慧俐、石渡規生

早退：小柳津智子

（敬称略、全て旧姓）

令和7年度 ねのはな同窓会 新幹事 就任挨拶

令和7年度学年幹事
中川誇子（令7）

令和7年3月の卒業生一同を代表して、この度、同窓会の新しい幹事に就任いたしましたことをご報告いたします。

これまで長年にわたり同窓会の活動を支えてくださった先輩方に心より感謝いたします。また、私たち新しい世代もその精神を引き継ぎ、母校と卒業生の皆様を繋げる架け橋となるべく努力してまいります。

卒業生同士の絆を深め、母校の発展に貢献できるよう尽力いたしますので今後ともご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。

千葉大学医学部附属看護学校の歴史・資料について

ゐのはな同窓会長
吉原俊雄（昭53）

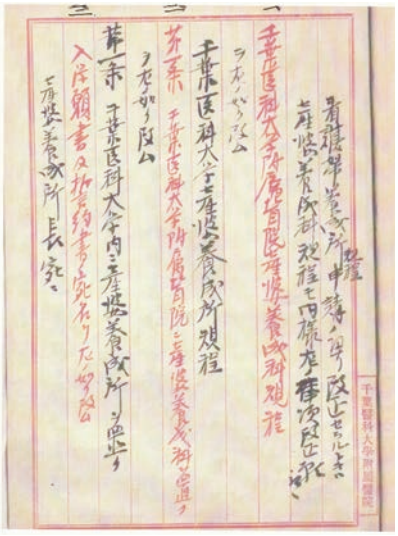


写真　同窓会館にて、資料の一部

令和6年11月29日に千葉大学医学部附属看護学校同窓会長、元病院看護部長の瀧口章子様と看護学校同窓会顧問・元附属病院副看護部長の門川由紀江様が医学部同窓会館に訪問されました。附属の看護学校は平成14年3月、52回生をもって閉校されています。ホームページも拝見しますと歴史を示す写真も掲載されていますが、現在もその詳細な歴史を示す写真・資料の保存については検討中とのことです。瀧口様、門川様の訪問は、創設当時の1回生から52回生までの貴重な資料が存在し、その保存場所などに苦慮しているということで、医学部での資料保存について現状を伺いたいということでした。看護学校の資料は医学部と同様に旧本館の一室にあったとのことで50年分の資料は段ボールに入れられ、その後、一部は正式に図書館に（最後の学校長で腫瘍内科学教授の税所宏光先生の保管依頼書があります）、その他複数の場所に移動しながらの保存で理想的な保存維持が困難であるとのことでした。看護学校が看護学部に移行した大学では資料がそのまま学部に移管され保存可能だが、千葉大学は看護学校から独立した形で学部新設されたことで、保存の継続性がないところが問題点なっているとのことでした。医学部の歴史的資料の保存の悩みと共通点もあり、ゐのはな同窓会としても協力して千葉大学医学部・附属病院全体の歴史を後世に残したいと考えています。

欧州医学史巡り

ギスラン博士博物館

杉田克生（昭54）

2023年10月19日ヘントにあるギスラン博士博物館（Museum Dr. Guislain Gent）を訪問した。ベルギー首都ブルッセルから列車で30分ぐらいの東フランドル地方中心都市である。主要駅のヘント・セント・ピータース駅からトラムに乗りGent Guislainstraatで降りると、目の前に博物館の正門がある。正門から精神科病院として利用された壮大なる建物群が見られる（写真）。

博物館内には欧州の精神医学史が時代別に展示されているが、特に18世紀後期から19世紀前期のコレクションが中心である。案内の英語では〝Gent madhouse〟と記載された精神病院で、身体拘束装具など目を惹かれる展示が多々ある。病院自体は1857年にベルギー初の精神科患者用救護施設（insane asylum）として開設された。建物内の広大な大部屋や倉庫なども驚かされる。精神科医療に関する歴史的展示品は、前精神医学期、前フロイト流ヒューマニティ期、生物学的精神医学期に分けて時代ごとに見学できる。

前精神医学期では、魔術的医療からキリスト教により体系化された医療が紹介されている。当時の精神病患者（lunatics）は悪霊や悪魔それ自体と見なされ、〝madohuse〟に収容された。前フロイト流ヒューマニティ期に入ると、より温和な医療が施された。ギスランはヘントの生まれで、精神患者の揺籃期に従事した。ただし当時でも冷水につける療法（cold plunge therapy）や回転療法（rotation therapy）なども実施されていた。

生物学を基礎にした精神医学の時代に入ると、そのパイオニアであるクレペリンやブロイラーにより患者の身体や意識への作用を強める試みが行われた。施設入所も進められたが、その中で優性論的思想の結果ドイツでのホロコーストへつながった歴史なども紹介されている。1960年代以降には、閉鎖病棟への批判が高まり、人権意識の高まりとともに社会参加を主体とする今日の精神科医療への歴史が理解できる博物館である。

ギスラン博士博物館正面玄関

ご住所・ご勤務先等に変更がございましたら当会にもご一報ください。
電話　（043）202−3750
FAX　（043）202−3753
e-mail：info@inohana.jp

静岡ゐのはな会

令和７年１月　第33号

第33号　ゐのはな静岡

ゐのはな静岡

発 行
令和7年1月吉日
第33号

発 行：
静岡ゐのはな会
会長 宮本恒彦

編 集：
ゐのはな静岡
編集委員会

同窓会の意義を考えるヒント　静岡ゐのはな会会長　宮本　恒彦

宮本 恒彦(S54)

日頃より静岡ゐのはな会の活動にご協力いただきありがとうございます。あまり意識されておられない方もおられるようですが、ゐのはな同窓会の会員で静岡県に在住の方は自動的に静岡ゐのはな会の会員になりますので、ぜひ帰属意識をもっていただき、お付き合い頂けると幸いです。

さて、２０２３年５月に新型コロナも感染症の５類に分類され、それを機に対面での会合も普通に開催されるようになり、静岡ゐのはな会も同年から対面での総会を再開していることはご承知かと思います。同窓会の基本は懇親にあると考えていますので、ようやくこうして顔を見ながら話ができるようになり、同窓会らしい行事が行えるようになったのは喜ばしい限りです。

私の周囲でも、大学の同期会も久しぶりに開催されるようになりましたし、中学校や高校の同期会も一斉に開かれ旧交を温める場になっています。特に中高の場合には皆それぞれ異なる分野で活躍しているわけですから、普段耳にしない話題に興味はつきません。その中で、高校の同期会が開かれた際に耳にした話をご紹介しようと思います。

話をしていたのは、もともと外務官僚で最後は宮内庁の式部官長を務めた男で、その関係で皇室の新年の恒例行事である歌会始にも関わっていたそうです。２０２２年の歌会始で入選した歌にこのようなものがあると言って紹介してくれたのがこれです。

できた子も
それなりの子も
働きぬいて
今日同窓会

子供の頃の仲間は本当にいろいろな人がいて、その後の人生も全く異なるものであったとしても、それぞれの人生経験を経てこうして同窓会に集まれたということに感慨を覚えるというような趣旨の歌だと思いますが、同窓会のあるべき姿の一端をうまく表現しているなと思ったものです。紹介してくれた彼もそのことを意識していたからこそ同期会の場で披露してくれたのでしょう。医学部の同窓会では背景は比較的似ているかもしれませんが、それでも人それぞれ違った人生を歩んできたはずです。ともあれそんなことは忘れて仲間としての交流を深める。ただそれだけで同窓会の意義があるのではないでしょうか。

年齢、学年、専門それぞれ違っていても縁あって静岡県にいる同窓。それ以上特に理由はなくても同窓生として交流を深めることにぜひ会の意義を見出して欲しいものだと考えています。会員の皆さんによって、会への関わりの度合いはいろいろですが、同窓会という性格上、関心の濃淡、関わる頻度などに差があること等は全く構わないことだと考えています。同窓であることを少し意識しておいていただき、皆さんの都合に合わせてお付き合いいただければよいでしょう。いままであまり関わらなかったからと言っても、躊躇せずに参加していただきたいものです。総会だけでなく、この会報誌への投稿なども歓迎いたします。

— 1 —

ゐのはな静岡　第33号
目次

同窓会の意義を考えるヒント
静岡ゐのはな会会長　宮本　恒彦…… 1

総会報告…………………………………………………… 2

理事就任の挨拶　独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）
三島総合病院　赤倉功一郎…… 4

沼津市立病院復職のご報告　藤本　　肇…… 5

学術講演会　第一部　気胸とびまん性嚢胞性肺疾患
－最近の話題－
第二部　千葉大学医学部ゐのはな同窓会活動
公益財団法人日産厚生会玉川病院気胸研究センター
栗原　正利…… 7

定年をむかえて　村上　直人……15

天城を歩く　宮本　恒彦……20

忍頂寺紀彰先生のご逝去を悼んで　宮本　恒彦……30

役員会報告………………………………………………31

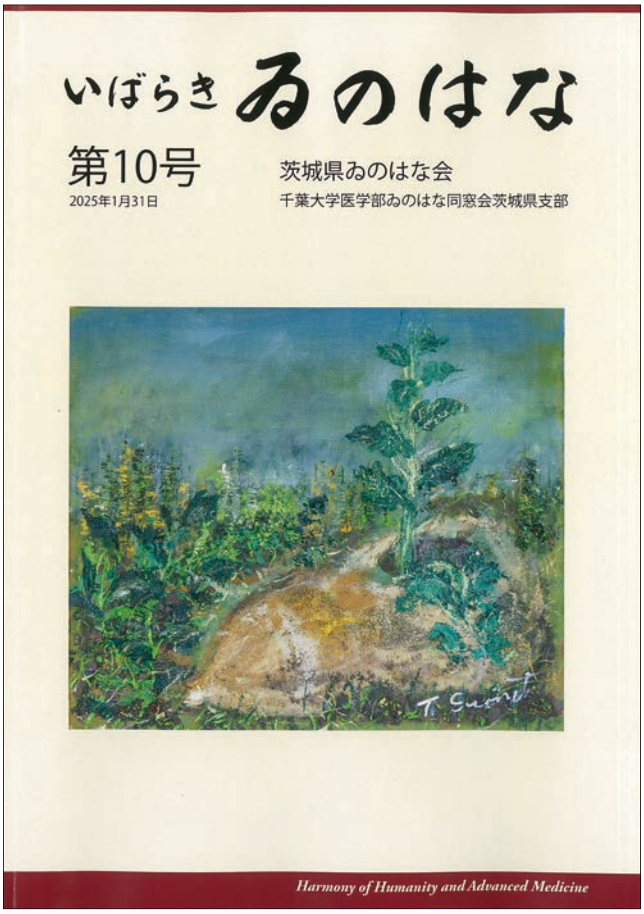
会員名簿…………………………………………………32

掲示板
令和７年度総会のお知らせ……………………………36

編集後記…………………………………………………36

茨城県ゐのはな会

令和７年１月　第10号



目　次

巻頭言………………………………………会長　石川　詔雄（昭和47年卒）　1

特別講演
疾患と腸内細菌叢……………………………大野　博司（昭和58年卒）　2

エッセイ
鹿島神宮宮司と教育論…………………………中山　宗春（昭和29年卒）　8
中山恒明記念館見学記（医療におけるビジョンの発展）‥中山　宗春（昭和29年卒）10
茨城で60年 ――そして“閉院”………………後藤　澄夫（昭和30年卒）13
詩吟を詠う（その2）…………………………竹島　　徹（昭和41年卒）14
筑波大学附属病院手術部における粉じんの研究　‥‥石川　詔雄（昭和47年卒）16
医療人として、ついに、後期高齢者!…………諸岡　信裕（昭和48年卒）18
音の出る箱……………………………………寺崎　太郎（昭和51年卒）21
千葉の想い出…………………………………高田　俊一（昭和52年卒）22
消えた業績 ―ドクターカーの運用―…………松前　孝幸（昭和52年卒）25
肝臓の穿刺法（非呼吸停止、フリーハンド）について：私が茨城に来て行ったこと
……………………………………仁平　　武（昭和58年卒）28
筑波大学退任のご報告…………………………山崎　正志（昭和58年卒）30
開院の挨拶……………………………………萱場　祐司（平成７年卒）32
表紙の言葉……………………………………榎本　貴夫（昭和47年卒）33
活 動 報 告……………………………………仁平　　武（昭和58年卒）34
編 集 後 記……………………………………松前　孝幸（昭和52年卒）36
投 稿 規 定…………………………………………………………… 37
会 員 名 簿…………………………………………………………… 38
会　　則……………………………………………………………… 41

ゐのはな同窓会支援

亥鼻分館への同窓会助成のお礼と購入書籍のご報告

亥鼻分館長　安　西　尚　彦（平2）

2024年度ゐのはな同窓会図書寄贈リスト

No.	書　名	部数	金額
1	文明の生態史観　増補新版	1	1,188
2	日本精神神経学会　専門医認定試験問題　解答と解説　第１集〔第１回～第３回〕	1	4,455
3	日本精神神経学会　専門医認定試験問題　解答と解説　第２集〔第４回～第６回〕	1	4,455
4	日本精神神経学会　専門医認定試験問題　解答と解説　第３集〔第７回～第９回〕	1	5,445
5	日本精神神経学会　専門医認定試験問題　解答と解説　第４集〔第10回～第12回〕	1	5,940
6	Evidence-based Medicine/Nursingのすべて　医学・看護論文を読み解いて臨床に活かす方法	1	3,168
7	精神科の薬がわかる本　第５版	1	2,277
8	これだけは気をつけたい！　高齢者への薬剤処方　第２版	1	4,356
9	イラストでまなぶ生理学　第４版	1	2,673
10	こころが動く医療コミュニケーション読本	1	2,178
11	まちづくりによる介護予防	1	2,772
12	システマティックレビュー／メタアナリシス／ガイドラインを読み始める方へ	1	3,861
13	精神診療プラチナマニュアルGrande　第３版	1	3,564
14	医療系学部のための「医療と社会」入門　第３版	1	2,524
15	がん薬物療法のひきだし　第２版	1	5,247
16	小児急性中耳炎診療ガイドライン　2024年版（第５版）	1	2,574
17	がん疼痛緩和の薬がわかる本　第４版	1	2,376
18	小児科診断・治療指針　改訂第３版	1	27,225
19	小児神経の画像診断　改訂第２版	1	14,850
20	がん薬物療法副作用管理マニュアル　第３版	1	3,960
21	前立腺癌診療ガイドライン　2023年版	1	4,257
22	基礎からわかるハイリスク薬　第３版	1	2,970
23	感覚過敏の僕が感じる世界	1	1,386
24	感覚の困りごとへの心のケア	1	2,376
25	まわり道を生きる言葉	1	1,584
26	ヘイル　薬と母乳MMM　原書第20版	1	11,880
27	小児科学　第11版	1	25,740
28	周産期マニュアル	1	29,700
29	骨折・脱臼　改訂５版	1	33,660
30	異界の歩き方（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
31	安全に狂う（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
32	シンクロと自由（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
33	みんな水の中（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
34	やってくる（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
35	「脳コワさん」支援ガイド（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
36	イルカと否定神学　対話ごときでなぜ回復が起こるのか（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
37	庭に埋めたものは掘り起こさなければならない（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
38	傷の声～絡まった糸をほどこうとした人の物語～（シリーズ　ケアをひらく）	1	1,980
39	構造と機能がつながる神経解剖生理学	1	7,425
40	ヘルニアの外科　第２版	1	21,780
41	喘息予防・管理ガイドライン＜2024＞	1	4,752
42	新版　心疾患の診断と手術	1	14,850
43	今日から使える医療統計（第２版）	1	3,366
44	基本がわかる放射線医学講義	1	4,455
45	Dr. Bonoのゲノム解読	1	3,168
46	人工臓器治療の落とし穴	1	4,950
47	ベインズ・ドミニチャク生化学　原書６版	1	9,306
48	病気の地図帳　増補改訂版	1	4,455
49	医歯薬学系博物館事典　増補改訂版	1	8,910
50	乳幼児健診マニュアル　第７版	1	3,168
51	眼科レジデントのためのベーシック手術　第２版	1	12,375
52	18トリソミー：よりよい医療・暮らしへの道しるべ　第２版	1	4,356
53	小児救命救急・ICUピックアップ＜7＞ECMO	1	5,544
54	グローバル感染症マニュアル　改訂第２版	1	5,742
55	抗不整脈薬の考え方，使い方	1	3,168
56	尿検査のみかた，考えかた　改訂２版	1	5,346
57	子どもの偏食Q&A　あるある悩みにどう答える	1	1,980
58	式から読み解く　臨床に役立つ生理学	1	3,564
59	コンサルト　きっと、うまくいく	1	2,178
60	救急外来　ただいま診断中！　第２版	1	6,336
61	小児栄養のトリセツ	1	3,564
62	研修医・当直医のための救急画像読影ガイド ― 危機的な所見を見逃さないために	1	5,148
63	レジデント&ジェネラリストのための　アレルギー診療必携ガイド	1	4,752
64	病気であって病気じゃない	1	2,970
65	臨床が変わる！　医療AIシンプル・レクチャー・ブック	1	2,475
66	糖尿病医療者のための災害時糖尿病診療マニュアル2024	1	1,683
67	精神科医として生きる ― 診察室の人間学 ―	1	2,772
68	MRI一問一答 ― 撮像法選択と読影に“必ず”役立つ基礎知識	1	5,940
69	大ちゃん先生に聞いてみた！　帯状疱疹診療Q&A	1	5,346
70	メンタルに悩むアスリートに寄り添いケアするための本 ― 競技の緊張、日常の不安・不眠、やる気が出ない、食事面の課題など	1	2,970
71	血行動態ハンドブック ― Step by Stepで理解する体内循環	1	4,455
72	小児救命救急・ICUピックアップ⑧外傷診療	1	4,257
73	乳房MRIアトラス	1	9,108
74	実践神経集中 ― 症例で学ぶ基本の考え方	1	3,960
75	血液浄化療法ハンドブック2024	1	6,435
76	Mayo Clinicの症例から学ぶ臨床感染症	1	4,158
77	ミクストメソッズ：質・量統合のパラダイム ― その理論と健康科学分野における応用と展開	1	4,752
78	こういうときはこうする！　感染症クリスタルエビデンス　診断編	1	10,890
79	ステロイドの真常識　アトピーのある子のスキンケア	1	1,782
80	そうだったのか！　精神科の病気 ― その人には何が起きていて、どうケアすると助けになるのか	1	1,980
81	マイナーエマージェンシー ― はじめの一歩	1	5,445
82	緩和ケア　即戦力ノート ― あなたにもできる、やさしい緩和ケア	1	2,673
83	感染対策60のQ&A	1	2,970
84	Dr. 長澤印　輸液・水電解質ドリル	1	4,158
85	子どものカゼのトリセツ	1	3,366
86	臨床・研究で活用できる！　QOL評価マニュアル	1	4,455
87	骨ベディア	1	6,732
88	FLASH薬理学	1	3,366
89	原則と対話で解決に導く医療倫理	1	2,871
90	漢方を交えた医療論	1	4,950
91	Dr. 平澤俊明の白熱講義実況中継　胃SEL/SMTの診断と治療	1	7,128
92	肝胆膵画像診断の鉄則	1	6,732
93	死を前にしたひとのこころを読み解く　緩和ケア÷精神医学	1	2,475
94	見て学ぶ　一般検査学アトラス	1	5,346
95	皮膚科手技大全	1	7,425
96	総合内科対策本部	1	4,455
97	発達障害Q&A	1	5,940
98	医学研究のための因果推論レクチャー	1	3,960
99	糖尿病・内分泌疾患の常識&非常識	1	3,762
100	コアカリノート：臨床医学まるごと整理	1	17,820
101	内分泌代謝疾患レジデントマニュアル　第５版	1	3,366
102	内視鏡所見のよみ方と鑑別診断 ― 上部消化管　第３版	1	11,880
103	神経病理インデックス　第２版	1	9,900
104	臨床現場のもやもやを解きほぐす　緩和ケア×生命倫理×社会学	1	2,376
105	腎生理がわかれば、水・電解質異常がわかる！　改訂２版	1	3,564
106	放射線治療計画ガイドライン　2024年版　第６版	1	5,346
107	がん患者診療のための栄養治療ガイドライン：総論編	1	2,673
108	コアカリ準拠臨床遺伝学テキストノート～ゲノム医療に必要な考え方を身につける～改訂第２版	1	3,960
109	インターライ方式看取りケアのためのアセスメントとケアプラン	1	3,366
110	ガイドラインに基づく　胎児心エコーテキスト　スクリーニング編　第２版	1	4,752
111	薬理学の基本～初学者でも薬理学がよくわかる１冊～（運動・からだ図解）	1	1,960
112	グローバル感染症の行方	1	2,673
113	医師と薬剤師が考える処方箋のつくり方	1	3,762
114	テキスト健康科学　改訂第３版	1	3,168
115	精神保健福祉法詳解　５訂	1	6,930
116	臨床研究の歩き方：これであなたも研究者！	1	3,465
117	保健・医療におけるシステマティックレビューとメタアナリシス	1	11,880
118	病気がみえる：チーム医療を担う医療人共通のテキストvol. 8　腎・泌尿器　第４版	4	15,840
119	こころの健康がみえる	3	13,365
120	診察ができる＜vol. 1＞身体診察	3	23,760
121	診察ができる＜vol. 2＞鑑別診断	3	23,760
122	からだがみえる	3	11,583
123	がんがみえる	3	11,583
124	イメカラ　脳・神経	1	1,881
125	遺伝カウンセリング標準テキスト	1	4,455
126	生命科学研究のためのデジタルツール入門　第２版	1	3,267
127	学会発表・医学英語論文執筆のトリセツ	1	3,465
128	フリー統計ソフトEZR（Easy R）で誰でも簡単統計解析　改訂第２版	1	4,158
129	ねころんで読める感染症と抗菌薬のきほんのき	1	2,178
130	薬剤師に聞いてみよう！　子どもの薬Q&A	1	3,960
131	働く人のメンタル不調サポートブック～メンタルヘルスにかかわる医療職種・支援者必携～	1	3,762
132	グレイ解剖学　原著第５版	1	11,880
133	即役立つ！　絶対身につけたい効果的な症例プレゼンテーションの仕方とその応用	1	3,021
	合計	146	800,000

学内情報

ゐのはな同窓会支援 第18回ちばBasic and Clinical Research Conference（BCRC）が開催されました

ゐのはな同窓会理事（総務担当）
安西尚彦（平2）

令和7年1月30日に、ゐのはな記念講堂とZoomのハイブリッド形式で「第18回ちばBCRC」が開催されました。ちばBCRCは、医学部生のリサーチマインドを涵養することを目的として、スカラーシッププログラム（研究室配属）の研究成果を発表する場であるとともに、例年医学研究院の基礎と臨床の教室からそれぞれ1名の教授による研究室紹介、そして特別講演などの全ての企画が、有志の学生事務局員により企画・運営されています。

今回の参加者は学生358名、教員・来賓等22名で、学生座長の司会で7題の発表が行われました。今回も昨年同様CommentScreenというZoomを利用したオンライン会議にリアルタイムで参加可能なツールを用いて学生が気軽に質疑応答を行えるようにしました。

研究室紹介は、基礎からは免疫発生学　平原潔教授が『全力で走れ！－免疫学・治療学研究へのいざない－』というテーマで、臨床から産婦人科学　甲賀かをり教授が『月経関連疾患を克服するには?』というテーマでお話をされました。

三木隆司医学部長の含蓄のある感動的な講評を頂きました後、スカラーシップ賞に続き、吉原俊雄同窓会長からゐのはな同窓会会長賞の表彰が行われ、最優秀賞の2名に授与されました。

最後の特別講演は長年本会の世話人をお勤めの中谷晴昭理事に座長をお務め頂き、昨年4月より学長に就任されました横手幸太郎先生により『希少難病を追及してヒトの老化に迫る』というタイトルで行われ、千葉大学医学部を卒業してからのご自身のご体験を踏まえ研究者としての人生から老化研究の進展について大変教育的なお話をいただきました。

第18回ちばBCRC 最優秀賞を受賞して

医学部5年　椎名萌子

この度、第18回ちばBCRCにおいて最優秀賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。準備に際しお力添え頂いた運営事務局ならびにご支援くださったゐのはな同窓会の皆様に御礼申し上げます。

本会では、臓器特異的な血管内皮細胞のストレス応答を単一細胞レベルで明らかにした研究について発表いたしました。背景として、生活習慣病や加齢関連疾患における血管の関与が多岐に渡る一方、臓器ごとに異なる病態を示すことが挙げられます。そこで、マウスに加齢ならびに肥満ストレスを負荷し、脂肪・心臓・骨格筋・肝臓といった代謝関連臓器における血管内皮細胞の遺伝子発現変動と制御転写因子の役割を解析しました。その結果、加齢負荷ではIFN経路の活性化という臓器共通の応答が認められた一方、肥満負荷では臓器特異的な反応が顕著に見られました。

次に、転写因子特性の網羅的解析を行い、動脈硬化好発臓器である心臓・骨格筋の血管内皮に共通した、転写因子Ebf3の関与を発見しました。特に加齢による活性化が見られ、qPCRにおいても標的分子の発現上昇を高齢マウスで確認できました。機能解析を進めていく中で、Ebf3の活性化が血管新生に関わるのではないかと仮説を立て、Ebf3血管内皮特異的ノックアウトマウスの下肢虚血モデルを用いて検証しました。その結果、Ebf3欠損群では血流回復が遅延し、本因子が血管新生に寄与している可能性が示唆されました。

私が血管内皮細胞に関心を持ったきっかけは、身内が罹患した全身性炎症疾患でありました。病態理解を深める中で血管内皮障害が疾患の根幹にあることを痛感し、このような個人的な経験を通じて自らの関心と向き合うべき分野を見出すことができました。学術的な興味にとどまらず、使命感を持って真摯に研究に取り組みたい所存です。

研究室では、論文の精読や発表技術などの基本的なスキルに加えて、研究手法についてもdryとwet両面から統合的にアプローチする重要性を教えて頂きました。特にシングルセル解析を用いて得られた膨大なデータから生物学的意義を見出し、仮説を立てた上でin vivo / in vitro実験で検証する過程、そして新たな知見をもとにさらなる研究へとつなげていく一連の流れに、尽きることのない魅力と奥深さを感じています。また、疾患の分子基盤の解明が病態理解の本質につながることを改めて認識し、臨床の礎となる基礎医学への探求心を深め、今後もより一層精進いたします。

最後に、平素よりご指導いただいている田中知明教授、横山真隆先生をはじめとする分子病態解析学教室の先生方に感謝を申し上げるとともに、先生方の研鑽を重ねられるご姿勢を範としてまいります。

会費納入のお願い 口座振替のおすすめ

ゐのはな同窓会費（5,000円）の納入をお願い致します。

会費納入には口座振替が便利です。

口座振替申し込み用紙は同窓会事務局までご請求ください。

TEL：043－202－3750
e-mail：info@inohana.jp

＊他金融機関からゆうちょ銀行への振込先
〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）
当座0143947

第18回ちばBCRC最優秀賞を受賞して

医学部4年 笹山大遥

この度、第18回ちばBCRC（Basic and Clinical Research Conference）において最優秀賞を賜りましたこと、大変嬉しく存じます。同会の開催にご尽力くださった皆様に心より感謝申し上げます。

本会では「CD69分子による胸腺内制御性T細胞の分化制御機構」という演題で発表をいたしました。

制御性T（Treg）細胞は自己反応性の抗原受容体（TCR）を発現した免疫抑制能を有する細胞であり、自己免疫疾患や炎症性疾患の抑制に極めて重要な働きをします。これまで、Treg細胞の分化機構について多くの研究がなされてきましたが、未だ不明な点が多いです。

私の所属する実験免疫学教室では、「CD69」に着目した研究を行っています。CD69は、多くの活性化白血球に発現が見られ、胸腺内で分化選択を受けているT細胞でも発現が見られます。とりわけ自己抗原を強く認識したT細胞から分化するTreg細胞は、CD69を高発現していますが、その役割は明らかにされていません。そこで、「Treg細胞の分化制御機構に対するCD69の役割」を明らかにすることを目的に研究を行いました。

CD69の作用機序の一つとして、リンパ球の遊走を担うS1P1受容体の発現を制御することが知られていますが、今回の研究から、CD69がスフィンゴシン-1-リン酸受容体1（S1P1）の発現制御とは異なるメカニズムで、Treg細胞分化を制御している可能性を見出しました。今後の展望として、CD69による具体的なシグナル調節機構や自己免疫疾患抑制への関与について研究を進めていきたいと考えています。

実験免疫学教室での研究を通じて、手技や解析方法、論文の読み方など、多くのことを学ぶ機会を得ました。このような恵まれた環境を提供してくださった先生方に感謝するとともに、今後は基礎研究で得た知識を活かし、医療に貢献できるよう努めてまいります。

最後に、本賞受賞にあたり、熱心にご指導いただきました木村元子教授、遠藤将大先生をはじめ、実験免疫学教室の皆様に深く感謝申し上げます。

お知らせ

みのはな同窓会事務局では、卒業年次別クラス名簿リスト、地域別会員リストおよび郵送用住所ラベルをご希望により作成いたします。

詳細は同窓会事務室にお問い合せください。

課外活動団体だより

千葉大学救急サークル C-TAT

医学部5年 橋本俊亮

救急サークルC-TATは一次救命措置の普及を目標とし、千葉大学医学部附属病院救急科・集中治療部の先生方や日本BLS協会の先生方のご指導の下、活動を行っている亥鼻地区の公認サークルです。今年度からは災害治療学研究所の先生方のご指導をいただき、災害医療の活動も開始いたしました。

コロナ禍以降、医学部上級生中心のサークルとなっておりましたが、新歓を行い、2025年3月時点で医学部18名（1年生から6年生まで所属）、薬学部1名、看護学部4名、国際教養学部1名の合計24名が所属するサークルとなりました。

普段はアメリカ心臓協会（AHA）公認BLSプロバイダーコースを月に2回ほど千葉大生向けに開催しており、その他亥鼻祭などのイベントを通じて、学内・学外向けに一次救命措置の普及活動を行っています。昨年度は自分たちの一次救命措置の技能を確かめる目的で、日本救急医学会学生・研修医部会主催の第10回全国医学生BLS選手権に出場し、過去最多となる全国47大学が出場した中、総合準優勝を収めることができました。

9月には当サークル初の災害医療に関する活動として、政府防災訓練の一環として千葉県館山市で行われた大規模地震時医療活動訓練に参加させていただき、その後災害治療学シンポジウムや日本災害医学会で報告させていただきました。

12月末には、千葉市機能別消防団の発足式が行われ、当サークル医学生メンバーが千葉市機能別消防団員として災害時、被災地に派遣され、医療支援にあたることとなりました。2025年1月1日に正式に発足し、多くのメディアでも取り上げていただきました。これからは病院で毎年行われる多数傷病者訓練や災害治療学研究所・千葉市主催の訓練に参加することで、災害時に少しでも役立てるよう、学びを深めていきたいと思っております。

千葉市機能別消防団発足式にて

当サークルは多くの先生方と関わりながら活動を行っていることが特徴の一つです。今年度も救急科中田孝明先生（サークル顧問）、大島拓先生、今枝太郎先生、飛世知宏先生、災害治療学研究所の田中知明先生、小野寺淳先生、医学部長の三木隆司先生をはじめ、多くの先生方のご支援・ご指導を賜り、様々な活動を行うことができました。この場をお借りして、深く御礼申し上げます。

役員名

代　表：橋本　俊亮（医5）

副代表・会計：森　英介（医5）

同窓会員著書の紹介

『看護師の正体　医師に怒り、患者に尽くし、同僚と張り合う』（中公新書ラクレ）

松永正訓（昭62）著

中央公論新社　定価　990円（税込）

2024年2月に上梓した『開業医の正体』（中公新書ラクレ）は、発売と同時に快調に売れ、11刷のヒットになりました。多くの感想をいただきましたが、看護師のリアルも知りたいという意見が目立ちました。

医療の現場の主役はときとして医師ではなく、看護師だったりします。特に病気で入院すると、病室に足繁く来てくれるのは医師ではなく看護師と分かります。たしかに看護師の世界を知りたいという読者は多いでしょう。こうして編集部との間で、『看護師の正体』という本を作ろうという企画が立ち上がりました。

しかし、私は看護師ではないので、この世界の内情をほとんど知りません。はっきり言って、看護に関するエッセイは書けません。どうすれば、看護師の本音やリアルの迫れるのでしょうか？

当初は、10人くらいの看護師に話を聞いて、さまざまなエピソードを集めようかと思いました。でも、そうすると話が散らかってしまうし、また、重複も多くなってしまいそうです。そこで、一人の看護師の半生にフォーカスを絞って深い話を聞いてみようと思い立ちました。ある看護師さんにお願いをしたところ、長時間のインタビューに応じてもらえることになりました。

さて、その看護師さんは、地方の市立看護学校を卒業し、地元の市立病院に勤務しました。彼女の経歴はけっこう波瀾万丈です。全体の流れはこんなふうになります。

看護学校→市立病院の内科・外科混合病棟→大学病院のオペ室へ出向→市立病院に戻り、麻酔科（ペインクリニック）外来→新病院が完成し、救急外来で勤務→オペ室勤務→県立周産期小児医療センターのオペ室→開業医のクリニックでパート勤務。

看護師になるためにはどういう勉強をするのか。戴帽式って、ナイチンゲールの誓いってどんな感じなのか。

右も左も分からない新人ナースはどうやって一人前になるのか。病棟勤務にはどんな仕事があるのか。

救急外来にはどんな重症患者が運び込まれてくるのか。そのときナースはどう対応するのか。

オペ室ナースはどうやって技術を磨いていき、最終的にはどういう地点まで到達することを目指しているのか。

看護師の世界はまだまだ女の世界。看護師同士がライバル関係になることはあるのか。

看護師から見て、良い医者とは？　ダメな医者とは？　ついでに職場の恋愛事情やセクハラについても聞いてみました。

結果として、看護師の舞台裏をたっぷり聞くことができました。驚きの連続です。脳外科の脳腫瘍摘出術の器械出しについて24時間働いた話とか、ナースはけっこう力仕事が多くみんな腰を痛めるという悩みとか、病院にありがちな怪談の噂に脅えるといった裏話とかも出てきました。笑える話も、ちょっとホロリとする話も。

本書を読めば、看護師がどれほど患者のために尽くそうと考えているかが分かるでしょう。本書が、患者と看護師の橋渡しの助けになってくれれば、著者としてこんなにうれしいことはありません。

自信をもって「おもしろい」と言える作品に仕上がりました。同窓のみなさまも、よかったら読んでみてください。

【次世代の医師・医療専門職とは何なのか？】
2025年に医療の課題解決に正面から問う書籍
「医良戦略2040 PARTⅡ」が刊行されました

吉村　健佑（平19）・佐光　凛星（医5）

医学部附属病院次世代医療構想センターは2019年に設置され、2021年度に『次世代医療クロストーク』を主催しました。多分野で先駆者として活躍する医療関係者13名とセンター長・吉村健佑（平19卒）が対談を行いました。2022年4月、『医良戦略2040～2040年を生き抜く13の戦略～』として対談内容を書籍化したところ若手医師や医学生などから一定の反響を得ることができ何回かの増刷を出しました。

2023年度には『次世代医療クロストーク』の第2弾を行いました。16名の学内外の登壇者たちと熱の籠った対談を行いました。オンラインにて毎回多くの方に登録・視聴いただきました。これをもとに、当センター2冊目の書籍刊行にあたるのが本書「医良戦略2040 PARTⅡ」となります。

本書は大きく2部構成にとなっています。前半は吉村から「医療政策を考える基礎となる現状認識」に対する「国や都道府県が打つ医療政策の動向」を概説しました。次世代医療構想センターで取り組んでいる政策研究・実務の成果も随所に詰まっています。後半は前述の対談16回に加え、吉村本人と現役医学生との対談を加えた全17回分をもとに再構成・編集したものです。

前書同様、『医療を良くするための試行錯誤の書』という共通点を持つため、『医良戦略2040 PARTⅡ』とシンプルな書名にしました。サブタイトルの『熱意を理性でドライブせよ』に込めた想いは、16名の戦う『トップランナー』たちが持つ熱い思いを理性で語るクロストークに向けたものです。医療の課題解決に正面から向き合い、それに心血を注ぐ16名の言葉をどうぞ味わってください。本書の企画、編集には次世代を担う2人の医学生が関わっております。佐光凛星と平井貴大（山口大学医学部）から医学生ならではの視点から出る言葉にもご注目ください。本書が学生から若手、ベテランの先生方も含め、みのはな同窓会員の皆様に届くことを願います。

眼科教室同窓会
2024年　第61号

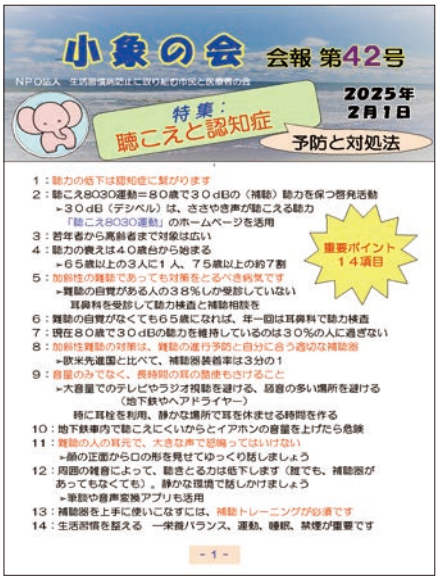
会員から

NPO小象の会の活動報告

NPO小象の会理事長
篠宮正樹（昭50）

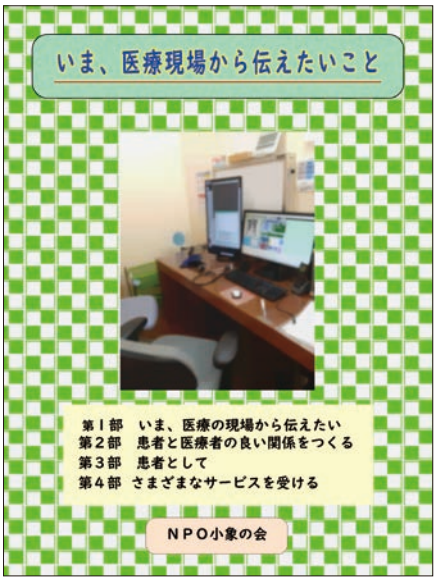
会報42号

加齢性難聴を、歳のせいだと諦めている方が多いのですが、ランセット２０２４の報告によると認知症の要因で修正可能なものとして、難聴が７％を占めて最大の危険因子である（修正可能な要因が合計45％になる）とのこと。本邦では聴力の衰えが65歳以上の３人に１人、75歳以上の約７割。聴力低下には補聴器使用を検討し、補聴器の調整に時間をかける必要があることを取り上げました。耳鼻科の関田恭子先生（平８）に監修して戴きました。千葉県での８０３０運動（80歳で30dBの聴力を保つことを目標とする、日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会の啓発推進活動）にも活用されました。



冊子『いま、医療現場から伝えたいこと』の発行

医療者側から市民に向けた冊子を発行。複数の医療従事者が執筆し、医療者が本音で伝えたいことを寄稿戴き、各方面へ配布しました。



小象フォーラム「読書と医療」

25年3月1日に対面の講演会を開催。日本に読書推進の手法「読書へのアニマシオン」を紹介し普及に努めていらっしゃる黒木秀子氏（夫君は黒木春郎先生（昭59））が講演。読書とは、読んだ内容を理解し人に伝えられるようになること。そのために訓練が必要であることが強調されました。活発な討論も行われました。

基礎的な読解力が不足すると、文章を正しく理解できず、自分の考えを的確に伝えることも難しくなります。これは、健康面や経済面を含む人生全般に影響を及ぼす可能性があります。奥深い読書を通じた言葉の世界を知ることが必要です。AIを効果的に使いこなすためにも、日本語の読解力や表現力はますます重要になると思います。

第100回千葉医学会　学術大会

日　時：2025年７月２日（水曜日）　15：00 ～ 17：15
会　場：千葉大学医学部附属病院　ガーネットホール

特別講演

「免疫に魅せられて」
演　者：徳　久　剛　史　先生（千葉大学　名誉教授/元千葉大学長）
座　長：幡　野　雅　彦　先生（千葉大学　名誉教授）

徳久　剛史 先生

招待講演

「免疫学研究の魅力 ―全力で走れ―」
演　者：木　村　元　子　先生（千葉大学大学院医学研究院　実験免疫学　教授）
座　長：本　橋　新一郎　先生（千葉大学大学院医学研究院　免疫細胞医学　教授）

◆参 加 費：無　料
◆申込手続：不　要　※WEB配信等はございません。

本講演会は日本医師会生涯教育講座（１単位，CC：０）として承認されています。
ご来場の際は、公共の交通機関をご利用願います。多くのご来場をお待ち申し上げております。

木村　元子 先生

問合せ：千葉医学会
TEL：043－202－3755　　FAX：043－202－3757
e-mail：info@c-med.org　　URL：https://www.c-med.org

令和７年度　千葉大学医師会主催　日本医師会認定産業医研修会
基礎（実地２単位）又は生涯（実地２単位）開催のご案内

標記研修会を下記の通り開催いたしますのでご参加下さいますようご案内申しあげます。
本研修会は日本医師会認定産業医制度における**認定産業医になるための研修及び更新を希望する医師**の研修です。

１．主　　催：千葉大学医師会

２．日　　時：令和７年11月19日（水）18時～ 20時

３．場　　所：千葉大学医学部・医学系総合研究棟３階
第１講義室
千葉市中央区亥鼻１－８－１
千葉大学亥鼻キャンパス内
JR千葉駅東口
７番バス乗り場から京成バスを利用15分、
「千葉大医学部・薬学部入口」下車　徒歩１分
※ご来場の際は公共の交通機関をご利用願います。

医学系総合研究棟

４．定　　員：70名

５．受 講 料：千葉大学医師会員　無料、非会員：2,000円（当日、現金のみ）

６．申込方法：下記URLまたは二次元コードよりお申込みください。
申込URL：https://forms.gle/SPLmLCZXNWSF1H6fA

７．申込期限：令和７年11月７日（金）　※定員に達しない場合は期日以降も受付いたします。

８．研修内容：基礎（実地２単位）又は生涯（実地２単位）　申請中

「作業環境とその管理」「作業環境測定実習」
千葉大学大学院医学研究院　環境労働衛生学　教　授　諏訪園　　靖 先生
同　　准教授　能　川　和　浩 先生
同　　助　教　渡　邉　由芙香 先生
※生涯教育講座のCC：７．医療の質と安全　１単位、11．予防と保健　１単位が取得可能

※定員になり次第締め切ります。
※受講票は発行しませんが、申込み受け付け後、事務局よりメール等によりご連絡いたします。
※本年度より単位シールは廃止となり、日本医師会　MAMIS：研修管理機能のシステムを用いて
単位付与を行ないます。また、受講に際し事前にMAMISマイページ登録が必須となります。
本件に関する問合せは、下記【医師会会員情報システム運営事務局】にお問合せをお願いします。

【医師会会員情報システム運営事務局】
「MAMISの操作」「ID・パスワード等再発行」等のMAMIS全般に関わる問合せ
e-mail：inquiry@mamis.med.or.jp　TEL：0120－110－030
お問合せフォーム　https://mamis.med.or.jp/contact/
平日10：00 ～ 18：00　土日祝、年末年始を除く平日

申込・問合せ：千葉大学医師会　事務局
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻１－８－１　千葉大学医学部・ぁのはな同窓会事務室内
Tel：043－202－3755　Fax：043－202－3757　e-mail：ishikai@c-med.org

令和6年度　第3回理事会議事要旨抜粋
（ZOOM会議）

日　時：令和7年2月26日（水）18時～

出席者：
吉原俊雄（会長）
栗原正利（副会長）
中村眞人（副会長）
大井利夫（参与）
吉川廣和（参与）
伊藤達雄（参与）
幡野雅彦（会計監事）
赤倉功一郎　石川詔雄
伊藤彰一　井上賢治
上田真喜子　北野慎一郎
小島広成　諏訪敏一
諏訪園靖　髙橋宏和
田邊政裕　鶴田好孝
林田和也　平澤　晃
星野　聡　松前孝幸
宮本恒彦　森本直樹
横須賀忠

（敬称略）

吉原俊雄会長が議長となり協議が進められた。

議題

1．報告事項

(1)予算執行状況（中間報告）

諏訪園靖理事より資料に基づき、収入については、会費は昨年と同じ納入率であり、入会金はこれから大学入学者より納入がある。特別寄付金の卒後50周年基金として昭和49年卒の先生方から寄付があった。メモリアル事業であるDVD収入については令和6年度も寄付があり、令和4年度からの合計は714万円ほどとなる。会報関連の寄付としては広告掲載料の令和5年分と令和6年度分の収入があった。

支出については、会議費は総会開催費用、理事会、委員会の会場費。次年度の総会は千葉大学内での開催を予定しているため予算より減少となる。報奨金（謝金等）は税理士、会計監事、例会時の会費徴収に対する教室へのお礼。会報・会誌については、ほぼ予算どおりである。図書館助成金もこれからの支出となる。ちばBCRC支援については、ちばBCRCと医療コンソーシアムに支援している。学生活動助成金は亥鼻祭への支援となる。支部活性化経費は9支部（近畿、東京、神奈川、千葉、静岡、茨城、埼玉、栃木、大学）に支援している。同窓サポートプロジェクト経費としては「千葉性暴力被害支援センターちさと」に法人会員費、卒後50年感謝状および卒後25年激励状作成費、ホームカミングデー開催費用など。メモリアル事業は、胸像製作代金、除幕式開催費用となっている事などが説明され、承認された。

(2)医学部旧本館DVD寄附状況

吉原会長より、DVDの在庫が多くあるので、令和6年度の白衣式から保護者に贈呈することが理事会で了承されており、寄付依頼書と共に配布をしたことが報告された。

(3)150周年記念文集について

吉原会長より、記念文集は3月中に昭和卒の会員と役員および執筆者に発送される。平成卒以降の会員についてはホームページから閲覧する方法としたと報告がされた。

(4)ホームカミングデーについて

田邊理事より、卒後50年は30名ほどの参加があり、開催への謝意が述べられた。卒後50年基金については現在100万円以上の寄付が集まっていると報告がされた。

吉原会長より、ホームカミングデーの開催日については亥鼻祭と同日の方が活気もあり良いのではとの意見がある。また、招待の卒年を10年あるいは15年も追加してはどうかとの意見があると説明がされ、この方向で実施していくことが承認された。

(5)教授就任資料

みのはな同窓会報に掲載した教授就任について、1年分まとめて提示する。

2．協議事項

(1)令和7年度行事予定

吉原会長より資料に基づき、年3回の理事会のうち1回は対面での開催とすることが決まっているので、4月24日の理事会はステーションコンファレンス東京で開催する。ホームカミングデーを亥鼻祭と同日の11月2日（日）に開催するなどの説明があり、行事予定が承認された。

(2)令和7年度総会について

例年東京で開催しているが、令和7年度は千葉大学医学部附属病院のガーネットホールで6月14日（土）に開催する。横手学長に講演を依頼。

みのはな同窓会賞として、中馬敦氏（昭62）中村眞人氏（昭54）、植村研一氏（昭34）、石川広己氏（昭55）が候補として推挙され、社会貢献賞に中馬敦氏（昭62）と中村眞人氏（昭54）、功労賞に植村研一氏（昭34）と石川広己氏（昭55）がそれぞれ承認された。

(3)今後の総会の開催方法について

吉原会長より、過去に東京支部、千葉県支部、大学支部と持ち回りで合同の総会を開催していたが、大学支部の負担もあることから現在は単独開催となっている。然しながら、神奈川支部・千葉県支部・東京支部と開催日が近いことから、合同開催に戻した方が良いのではとの意見があった。今年は千葉大学病院内での開催でもあり、大学支部との合同開催にすることが説明され、次年度は東京支部、次いで千葉県支部となることが承認された。

(4)令和7年度役員選出について

先日の総務会で現会長が継続してとの意見があり吉原会長から、差し支えなければ、もう一期会長を継続し、役員も次世代に繋げるようにバトンタッチしたいとの説明があり、承認された。

吉原会長より資料に基づき、神奈川みのはな会より新理事　平澤晃氏（昭60）と野澤聡志氏（平2）、近畿みのはな会より　島正之氏（昭59）の推薦があり、これらが承認された。4月から茨城みのはな会会長になる松前孝幸氏からご挨拶がされた。

(5)令和7年度予算編成

諏訪園理事より資料に基づき、令和6年度の予算編成について説明があった。総会費は千葉大学内での開催のため減額。旅費は胸像制作映像撮影が終了したため、例年の額に減額。課外活動助成金としては、オーケストラフェスティバル主管校のための支援。メモリアル事業は終了したため予算は0とした。

吉原会長より、メモリアル事業については一旦終了し、今後は同窓会館の補修等を検討すると説明がされた。

(6)医学部との胸像寄贈の取り交わしについて

吉原会長より資料に基づき、メモリアル事業である胸像と年表については医学部に寄贈する手続きを行うことが説明され、医学部へ提出することが承認された。

令和７年度千葉大学医学部
ホームカミングデー
（卒後四半世紀・半世紀卒業生の集い）
開催のお知らせ

開催日：令和７年11月２日（日）

ご案内学年：昭和50年卒業生（卒後50年）
平成12年卒業生（卒後25年）
平成24年卒業生（卒後15年）

母校においてホームカミングデーを上記日程で開催します。

卒後50年（昭和50年卒）、25年（平成12年卒）、15年（平成24年卒）の会員皆様にご来校頂き、これまでのご活躍への感謝の念をお伝えし、感謝状・激励状および記念品を贈呈いたしたいと存じます。

万障お繰り合わせの上、ご参集いただけましたら幸いです。

おくやみ

家本　誠一（昭22）
中村　彰宏（専24）
横山　専二（専25）
阿部　忠夫（昭27）
勝呂　清司（昭27）
服部　了敦（昭30）
浅見　正道（昭30）
斉藤　和男（昭30）
野本　繁夫（昭31）
加藤　惠司（昭32）
大久保美智子（昭33）
石川　一眞（昭33）
宇野　敏（群馬大・昭33）
中島　建邦（昭33）
檜垣　有徳（昭34）
春日　哲夫（昭34）
横山　哲郎（群馬大・昭35）
鎌田　慶一（昭36）
新井　道子（昭36）
宮代　守（昭37）
佐々木

宍倉　正胤（昭37）
油井　信春（昭37）
大木　勲（昭38）
中田　瑛浩（昭38）
遠藤　毅（昭39）
本村　恵子（昭39）
王子　明（昭41）
藤田　道夫（昭41）
鎗木　靖雄（昭43）
佐藤　政教（昭44）
栃木　捷一郎（北海道大・昭44）
久保　長生（昭45）
堀内　正敏（昭45）
鈴木　洋文（昭48）
斎藤　典男（昭51）
多曜　直樹（平3）
日野　俊明（平元）
児玉　友信（富山医薬大・昭62）（平7）
今井
奥野

編集後記

ゐのはな同窓会報第197号をご覧いただきありがとうございます。

私自身は千葉大学を卒業していないのですが、旧第一内科（現消化器内科）の医局に入局し、千葉大学病院や千葉県がんセンター、栃木県の上都賀総合病院などを経て、栃木県宇都宮市で開業医をしています。旧第一内科の先輩の松本伸行先生が聖マリアンナ医科大学の教授に就任されたとのことで、喜ばしく思います。益々の活躍を期待しています。

各地ゐのはな会からの報告がありました。私の所属している栃木県ゐのはな会は、コロナ禍で現地での懇親会は一時中止となっていましたが、一昨年度から復活し、昨年度はかなりの盛り上がりをみせ、今年度はさらに盛況でした。千葉大学という共通項で交流を深められることは意義深いと思います。

開業医は不当に金儲けをしているという偏見が世の中には少しあるように思います。松永正訓先生の前著「開業医の正体」では、それらの偏見を吹き飛ばす内容で面白く読ませていただきました。今回、それに続いて「看護師の正体」を執筆されました。一人の看護師の生きざまが書かれています。一人の看護師をとおして看護師がどんな仕事をして、どういう体験を積み重ね、どんなことを考えているかが書かれています。普遍的な看護師像とはちょっと違うと思いますが、そこがまた面白いです。

千葉大学病院次世代医療構想センター長・特任教授の吉村健佑先生の執筆された「医良戦略2040 PART II」も読ませていただきました。この本は、現在の医療の問題点、今後の方向性の提言をされています。いろいろな立場の執筆者がいるのですが、それぞれの課題を解決していこうという熱意がすごいです。是非手に取って、いろいろな刺激を受けて欲しいと思います。

この会報が、少しでもみなさまのお役に立てたら幸いです。

宍戸忠幸（山梨医大・平8）

―― 会報197号編集委員 ――

菱木　知郎（平5）編集委員長
杉田　克生（昭54）　白澤　浩（昭57）
剣持　敬（昭58）　今野　慎（昭62）
小島　広成（平3）　宍戸　忠幸（山梨医大・平8）
大西俊一郎（平17）　（敬称略）

千葉医学101巻1号　2025年3月

活動報告

看護師の輸血教育の現状と課題
～千葉県内研修参加者へのアンケート調査～
猪越ひろむ　高須清子　多原好江　狩野麻紀　前橋美智子
石井洋子　菅原美穂　草刈真由美　長谷川浩子
井関　徹　大島　渚　堺田恵美子　三村尚也

千葉医学会奨励賞

制御性T細胞サブセットの分化と組織恒常性維持機構
上野達矢　遠藤将大
Cytotoxic CD4⁺T細胞の生体内での役割　神津隆之介

学　会

第1500回千葉医学会例会・令和5年度第23回千葉大学大学院医学研究院呼吸器病態外科学教室例会
第1524回千葉医学会例会・第42回脳神経内科学教室例会
第17回ちばBasic & Clinical Research Conference学生発表抄録

編集後記　金田篤志

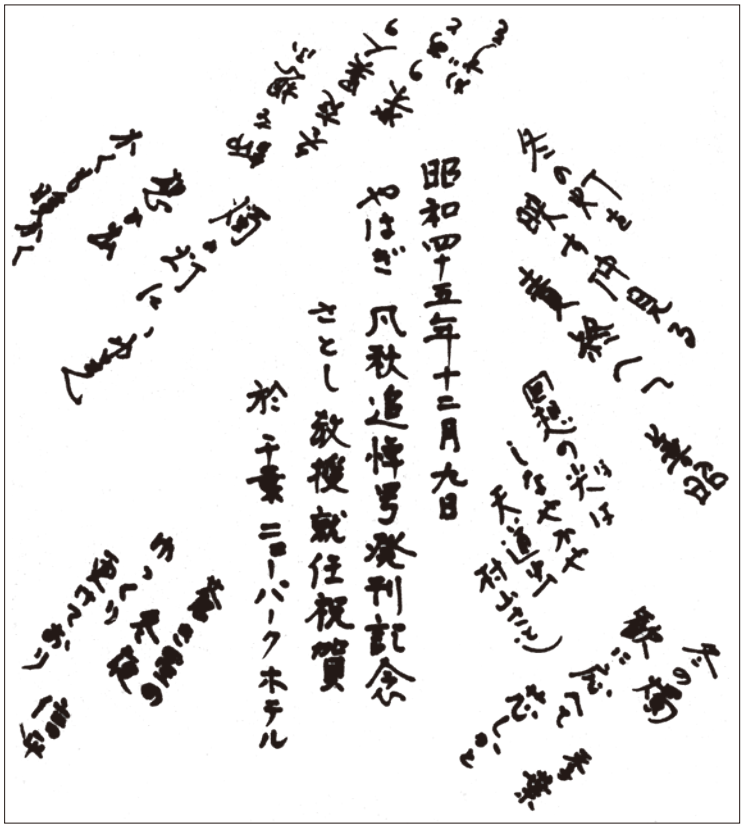
Chiba Medical Journal

Original Article

Differential effects of romosozumab dosing on bone fusion:
an examination in a rat posterolateral lumbar fusion (PLF) model
Noriyasu Toshi, Kazuhide Inage, Kohei Okuyama, Geundong Kim, Tomohito Mukaihata
Ikuko Tajiri, Sumihisa Orita, Yawara Eguchi, Yasuhiro Shiga, Masahiro Inoue
Miyako Suzuki-Narita, Takahisa Hishiya, Takahito Arai, Soichiro Tokeshi
Susumu Tashiro, Shuhei Ohyama, Noritaka Suzuki, and Seiji Ohtori

Reduced schematic inference in patients with social anxiety disorder
Yuko Isobe, Sayo Hamatani, Yoshikazu Noda, Rio Kamashita
Tokiko Yoshida, Tsubasa Sasaki, Ikuyo Ohira, Junbing He
Eiji Shimizu, and Yoshiyuki Hirano

遺品寄贈



やはぎ凡秋追悼号発刊記念で書かれた色紙
村山さとし教授就任祝賀会にて
（昭和45年12月9日）